

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第438集

きた じょう やかた あと
北の城館跡発掘調査報告書

中山間地域総合整備事業浅沢地区埋蔵文化財発掘調査

岩手県盛岡地方振興局農政部農村整備室

助 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

きた

じょう やかたあと

北の城館跡発掘調査報告書

中山間地域総合整備事業浅沢地区埋蔵文化財発掘調査

序

豊かな自然に恵まれた岩手県には、縄文時代をはじめとする数多くの遺跡や重要な文化財が残されております。これら多くの先人達の創造してきた文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは県民に課せられた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発に伴う社会资本の充実も重要な一施策であります。発掘調査により遺跡が消滅することは、まことに惜しいことではありますが、その反面それまで闇に包まれていた先人達の営みに光明があたるもの事実であります。

このような埋蔵文化財の保護・保存と開発との調和も今日的な課題であり、財団法人岩手県文化振興事業団は埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、中山間地域総合整備事業に関連して、平成14年度に発掘調査を行った安代町北の城館跡の発掘調査をまとめたものであります。北の城館跡は、安代町の中央部を流れる安比川右岸の河岸段丘上に立地しており、調査の結果、平安時代と中世の堅穴住居跡、館跡の郭やテラス、堀跡等が検出されました。特に、堀跡は二重堀であることが確認され、館が堅固に造られていたことが分かりました。また、平安時代の堅穴住居跡から刀剣が出土するなど、貴重な資料を提供することができました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成にご指導・ご協力を賜りました岩手県盛岡地方振興局農政部農村整備室、安代町教育委員会をはじめとする関係者各位に衷心より謝意を表します。

平成 15 年 10 月

財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長 合 田 武

例　言

1. 本報告書は、岩手県岩手郡安代町字石神43-1ほかに所在する北の城 館跡の発掘調査結果を収録したものである。
2. 本遺跡の調査は、中山間地域総合整備事業に伴う記録保存を目的とした緊急発掘調査である。調査は、岩手県盛岡地方振興局農政部農村整備室と岩手県教育委員会生涯学習文化課との協議を経て、岩手県盛岡地方振興局農政部農村整備室の委託を受けた財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
3. 本遺跡の岩手県遺跡台帳の遺跡番号及び遺跡調査路号は次のとおりである。
遺跡番号　JE55-1261　　遺跡調査路号　KJY-02
4. 野外調査の調査期間・調査面積・調査担当者は次のとおりである。
調査期間　平成14年7月1日～10月11日
調査面積　3,920m²
調査担当者　佐々木信一、野中真盛
5. 室内整理の期間と担当者は次のとおりである。
整理期間　平成14年12月16日～平成15年3月31日
整理担当者　佐々木信一
6. 各種鑑定にあたっては、次の方々に依頼した。
石質鑑定　花崗岩研究会
鉄製品の保存処理　岩手県立博物館
7. 基準点測量及び空中写真撮影は、次の機関に委託した。
基準点測量　株式会社土木技術コンサルタント
写真地形測量　株式会社ハイマーテック
空中写真撮影　株式会社ハイマーテック
8. 野外調査及び本報告書の作成にあたっては、次の方にご協力・ご指導をいただいた（敬称略）。
東本茂樹（安代町教育委員会）
9. 本遺跡から出土した遺物及び調査資料は岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。
10. 本遺跡の調査成果は、先に「現地説明会資料」（平成14年9月27日）、「岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成14年度分）」に発表しているが、本書の内容が優先するものである。

目 次

序

例言

本 文

I 調査に至る経過.....	1	2. 中世の堅穴住居跡.....	24
II 遺跡の立地と環境.....	1	3. 住居状遺構.....	25
1. 遺跡の位置.....	1	4. 土坑.....	27
2. 遺跡の立地と周辺の地形.....	1	5. 柱穴状小土坑.....	33
3. 基本層序.....	4	6. 溝跡.....	33
4. 周辺の遺跡.....	5	7. 堀跡.....	36
III 野外調査と室内整理の方法.....	9	8. 遺構外の出土遺物.....	43
1. 野外調査.....	9	V まとめ.....	47
2. 室内整理.....	10	1. 遺構.....	47
IV 検出された遺構と出土遺物.....	19	2. 遺物.....	50
1. 平安時代の堅穴住居跡.....	19		

表

第1表 周辺の遺跡一覧表.....	7	第6表 平安時代の堅穴住居跡一覧表.....	47
第2表 繩文土器觀察表.....	45	第7表 土坑一覧表.....	48
第3表 土師器・須恵器觀察表.....	45	第8表 堀跡一覧表.....	49
第4表 石器觀察表.....	46	第9表 安代町内の館跡（一部）.....	50
第5表 鉄製品觀察表.....	46		

図 版

第1図 岩手県における遺跡位置図.....	2	第6図 郭斜面断面図（1）.....	12
第2図 遺跡周辺の地形図.....	3	第7図 郭斜面断面図（2）.....	13
第3図 基本土層図.....	4	第8図 郭斜面断面図（3）.....	14
第4図 周辺の遺跡位置図.....	6	第9図 地形測量図.....	15・16
第5図 スクリーントーン・土器実測図凡例.....	11	第10図 北の城館跡遺構配置図.....	17・18

第11図	1号住居跡	20	第22図	柱穴状小土坑	34
第12図	1号住居跡出土遺物	21	第23図	溝跡	35
第13図	2号住居跡	22	第24図	1号堀跡出土遺物	36
第14図	2号住居跡出土遺物	23	第25図	1号堀跡	37
第15図	中世の竪穴住居跡	25	第26図	2号堀跡	38
第16図	住居状遺構	26	第27図	3号堀跡出土遺物	39
第17図	住居状遺構出土遺物	26	第28図	3号堀跡	40
第18図	1号・2号・3号・4号土坑	28	第29図	4号堀跡	41
第19図	5号・6号・7号土坑	30	第30図	4号堀跡出土遺物	42
第20図	7号土坑出土遺物	31	第31図	遺構外の出土遺物	44
第21図	8号・9号土坑	32	第32図	堀跡	49

写真図版

写真図版1	遺跡遠景	55	写真図版12	6号・7号・8号・9号土坑	66
写真図版2	調査区近景	56	写真図版13	柱穴状小土坑	67
写真図版3	調査区全景、上層断面	57	写真図版14	溝跡・現地説明会	68
写真図版4	調査区近景	58	写真図版15	1号堀跡	69
写真図版5	北東部土層断面、作業の様子	59	写真図版16	2号堀跡	70
写真図版6	1号住居跡	60	写真図版17	3号堀跡	71
写真図版7	2号住居跡(1)	61	写真図版18	4号堀跡、現地説明会	72
写真図版8	2号住居跡(2)	62	写真図版19	遺構内出土遺物(1)	73
写真図版9	中世の住居跡	63	写真図版20	遺構内出土遺物(2)・ 遺構外出土遺物(1)	74
写真図版10	住居状遺構	64	写真図版21	遺構外出土遺物(2)	75
写真図版11	1号・2号・3号・ 4号・5号土坑	65			

I 調査に至る経過

中山間地域総合整備事業浅沢地区は、岩手郡安代町の旧浅沢村を事業区域とし、地域の農業農村の活性化を図るために、は楊整備、農道整備などの農業基盤整備のほか、集落道、農村公園などの農村生活環境整備を総合的に実施する計画で、平成12年度に事業採択され、平成15年度から着工する予定である。

当該事業区域の埋蔵文化財保有地については、当該事業の実施主体である岩手県盛岡地方振興局農政部農村整備室の依頼を受け、調査計画段階の平成11年度から平成13年度にかけて岩手県教育委員会事務局および安代町教育委員会で試掘調査を実施しており、岩手県教育委員会事務局との協議の結果、発掘調査が必要となり、平成14年度、(財) 岩手県文化振興事業団に調査を委託することになったものである。

(岩手県盛岡地方振興局農政部農村整備室)

II 遺跡の立地と環境

1. 遺跡の位置

北の城館跡は岩手県岩手郡安代町にあり、JR花輪線荒屋新町駅の北東約4kmに位置する。安代町は、盛岡市の北北西約50km、岩手県北端部にあり、東に浄法寺町、西に秋田県鹿角市、南に西根町・松尾村、北に青森県田子町が隣接している。主要交通路は、国道282号とJR花輪線が南から西へ弧状に通り、これとほぼ平行して東北縦貫自動車道が通っている。東北縦貫自動車道安代ジャンクションからは八戸自動車道が接続し、北東に延びている。

本遺跡は、国土地理院発行の5万分の1地形図「荒屋」NK-54-18-16(八戸16号)の図幅に含まれ、北緯36度7分6秒、東経140度4分39秒付近に位置する。

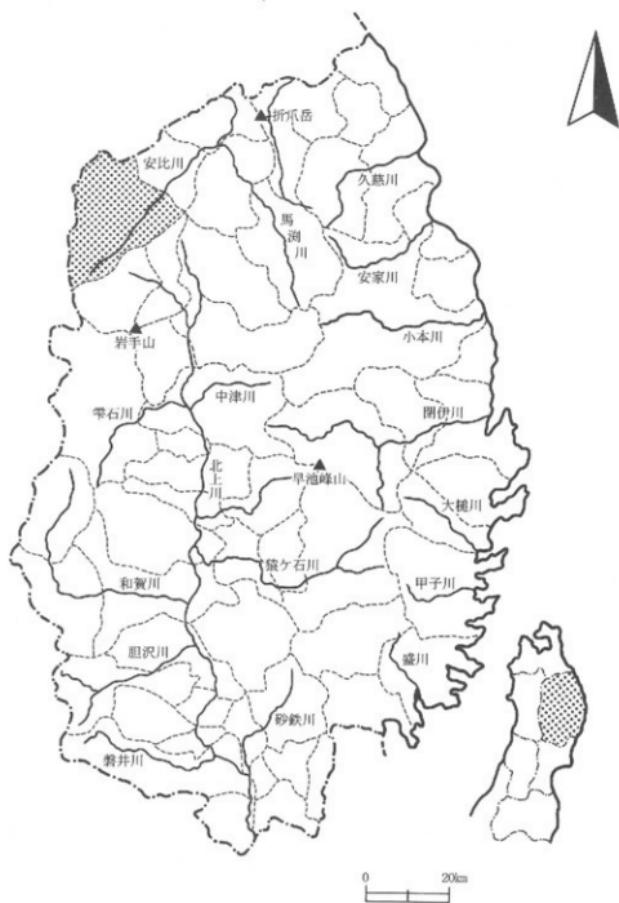
2. 遺跡の立地と周辺の地形

安代町は、周囲を四角岳(1,003m)、中岳(1,024.2m)、皮投岳(1,122.4m)、呱子森(1,019m)、八幡平(1,613.6m)、源太森(1,595m)、茶臼岳(1,578m)、恵比須森(1,496m)、大黒森(1,446m)、屋ノ棟岳(1,397.4m)、西森山(1,328m)、前森山(1,304.7m)、七時雨山(1,060m)など、1,000m級の山々に囲まれている。また、町の中央部を南北に走る山々の中には、安比岳(1,458.3m)、比山(1,037.9m)、高倉山(1,051m)のように1,000mを超す山々があり、町の東部を北東に流れ太平洋に注ぐ安比川と、西流し日本海に注ぐ米代川との分水界をなしている。

安比川流域では、赤坂田・扇塚付近の東岸、曲田と日名市沢との合流地点付近、中佐井付近の東岸に河岸

段丘が、荒屋新町・中佐井付近には沖積地がそれぞれ形成されている。標高は280~400mで多くの遺跡がこの地形面に分布している。

北の城館跡は中佐井付近の東岸の河岸段丘上に位置しており、標高は289~291mで、現況は畠地、原野、山林である。



第1図 岩手県における遺跡位置図



第2図 遺跡周辺の地形図

3. 基本層序

本遺跡の上層は、南西部の畑部分と北東部の館部分とで若干異なっている。それぞれの基本層序は次の通りである。なお、土層断面図は、それぞれグリッドC II b 7とB IV a 0で作成したものである。

<南西部の畑部分>

I層 10YR2/2 黒褐色 シルト 表土である。よく縮まり、粘性がある。径1mm未満の砂粒を含む。層厚は10~15cmである。本層下部が遺構検出面である。

II層 10YR5/6 黄褐色 粘土質シルト 壓く縮まるが、粘性は弱い。層厚は50cm以上である。

<北東部の館部分>

I層 10YR1.7/1 黒色 シルト 表土である。よく縮まり、粘性がある。層厚は12~19cmである。

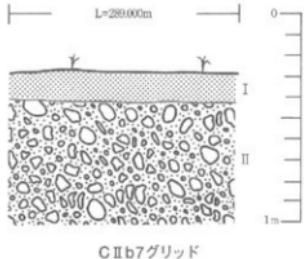
II層 10YR2/1 黒色 シルト よく縮まり、粘性がある。黄褐色土粒を10%程度含んでいる。層厚は3~12cmである。

III層 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト よく縮まり、粘性がある。黄褐色土粒を15~20%程度含んでいる。層厚は4~35cmである。本層下部が遺構検出面である。

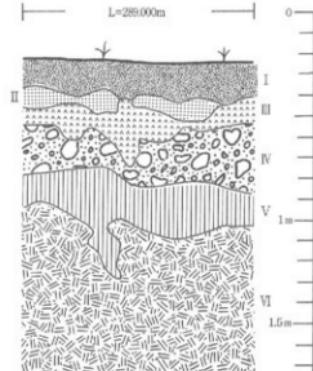
IV層 10YR5/6 黄褐色 粘土質シルト よく縮まるが、粘性は弱い。浅黄橙色の小礫を2%程度含んでいる。層厚は8~34cmである。III層同様遺構検出面である。

V層 10YR5/8 黄褐色 粘土質シルト よく縮まるが、粘性は弱い。浅黄橙色の小礫を3%程度含んでいる。層厚は17~27cmである。

VI層 10YR7/8 黄橙色 粘土質シルト よく縮まるが、粘性は弱い。浅黄橙色の小礫を5%程度含んでいる。層厚は50cm以上である。



C II b 7グリッド



B IV a 0グリッド

第3図 基本土層図

4. 周辺の遺跡

安代町には、現在225カ所の遺跡が確認されている。時代別では縄文時代が最も多く、次いで古代、中世、近世、弥生時代となっている。これらの遺跡は、安比川と来代川、及びその支流の河川が形成した段丘上や低地に多く分布している。^{註1}

安代町ではこれまで、有矢野遺跡の一部試掘（1974年）、保土沢遺跡（1975年）、東北縦貫自動車道建設に伴い調査された17遺跡（1978～1984年）、目名市遺跡（1996年）、有矢野遺跡（1998年）が調査されている。

主な遺跡を挙げると、縄文時代では有矢野遺跡（早期・前期）、小屋の畠遺跡、横間台遺跡、曲田Ⅰ遺跡（以上前期）、荒屋Ⅰ・Ⅱ遺跡、越戸Ⅱ遺跡、上の山Ⅶ遺跡（以上中期）、赤坂田Ⅰ・Ⅱ遺跡、扇畠Ⅱ遺跡、水神遺跡、上の山Ⅷ・Ⅹ・Ⅺ遺跡（以上後期）、上の山Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡、曲田Ⅰ遺跡（以上晚期）があり、後期・晚期に属する遺跡が多い。

弥生時代では荒屋Ⅱ遺跡、上の山Ⅱ遺跡、水神遺跡、曲田Ⅰ遺跡があり、水神遺跡では堅穴住居跡、曲田Ⅰ遺跡では墓壙が検出されている。

古代では沢Ⅰ遺跡（奈良時代）から栗洲式比定の土師器片が出土し、又、扇畠Ⅰ遺跡、上の山Ⅶ遺跡、保土沢遺跡（以上平安時代）からは、堅穴住居跡が検出されている。遺跡数では平安時代のものが多い。

中世では城館跡があり、現在21カ所が確認されている。主な城館跡は田山館（上館・中館・下館の三郭と空堀からなる町内最大規模の館跡）、佐比内館（二重の空堀を持つ單郭式の館跡）、上の山館跡（箱塀・築研堀・腰曲輪・犬走りなど検出）などがある。立地をみると、山地や丘陵の先端部につくられ、下位の段丘とは30～40mの比高差を持つ館跡が多い。

近世では一里塚や番所跡がある。主なものを挙げると、一里塚は七時雨一里塚、荒屋一里塚、曲田一里塚、番所跡では田山番所跡がある。

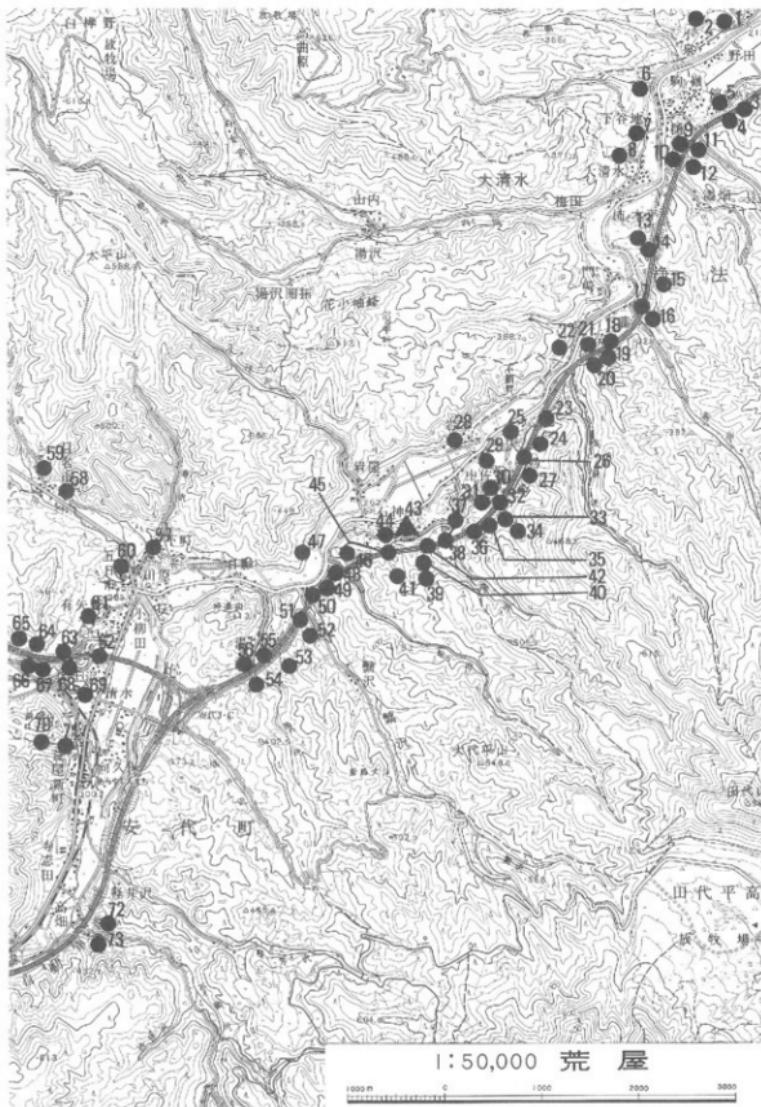
北の城館跡は安比川流域に位置しており、同流域には北の城館跡の他に、石神Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡、水神遺跡、八幡館跡、上の山館跡（以上安代町）、祐の木平Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ遺跡、五庵Ⅰ・Ⅱ遺跡（以上浄法寺町）などがある。

第1表は、北の城館跡周辺の遺跡（安代町、浄法寺町）についてまとめたものである。なお、遺跡の位置については第4図に示してある。

註1 岩手県教育委員会生涯学習文化課の遺跡台帳2000年度版による。

引用・参考文献

- （財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1985）：『祐の木平Ⅲ遺跡発掘調査報告書』 岩埋文第59集
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1986）：『開沢口遺跡発掘調査報告書』 岩埋文第95集
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1996）：『目名市Ⅱ遺跡発掘調査報告書』 岩埋文第261集
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1999）：『横間Ⅱ遺跡・谷地田Ⅰ遺跡・有矢野遺跡・有矢野館跡発掘調査報告書』 岩埋文第303集



第4図 周辺の遺跡位置図

第1表 周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物等
1	小泉館	城館跡、散布地	縄文・中世	縄文土器、スクレイパー、単郭、空堀
2	小泉	散布地	縄文	縄文土器
3	五座Ⅱ	集落跡	縄文～近世	堅穴住居跡（古代、中近世）、掘立柱建物跡
4	五座Ⅰ	散布地	縄文～近世	堅穴住居跡（縄文、平安）、土坑
5	鷹ヶ岳館	城館跡	中世	一郭（八幡館、大館、西館、新城館）、堀
6	大清水館	城館跡	中世	三郭（建物跡）、空堀
7	下谷地	散布地	縄文	縄文土器（後期）
8	大清水	集落跡	縄文	縄文土器、石器、猿形土製品
9	田余内Ⅰ	集落跡	縄文～古代	陥し穴、堅穴住居跡（平安）
10	津畠	散布地	縄文	縄文土器（前期末）
11	田余内Ⅱ	散布地	縄文～古代	石器、縄文土器、土簡器
12	田余内Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器（後期、晚期）
13	柿の木平館	城館跡	中世	単郭、空堀
14	柿の木平Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器（後期、晚期）
15	柿の木平Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器
16	柿の木平Ⅳ	散布地	縄文	縄文土器
17	柿の木平Ⅴ	狩猟場	縄文	陥し穴、土坑、配石遺構
18	下藤館	城館跡	中世	腰堀、空堀
19	下藤Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器（後期、晚期）
20	下藤Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器
21	下藤Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器
22	門崎	散布地	縄文	縄文土器
23	土沢Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器（後期、晚期）
24	水神	集落跡	縄文、弥生	縄文土器（中期～後期）、土坑、陥し穴
25	土沢Ⅱ	散布地	縄文、近世	縄文土器（後期～晚期）、石器
26	土沢Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器（後期～晚期）
27	山岸Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器（後期～晚期）、石器
28	下の田	散布地	縄文	縄文土器（後期）
29	下の田館	城館跡、集落跡	縄文、中世	縄文土器（後期、晚期）
30	中佐井Ⅰ	集落跡	縄文	縄文土器（後期、晚期）
31	中佐井Ⅱ	集落跡	縄文	縄文土器（前期～後期）、石器
32	中佐井Ⅲ	集落跡	縄文	縄文土器
33	中佐井Ⅴ	集落跡	縄文	縄文土器
34	山岸Ⅱ	集落跡	縄文	縄文土器（後期、晚期）
35	中佐井Ⅳ	集落跡	縄文	縄文土器（中期～後期）
36	山ノ神	集落跡	縄文、平安	縄文土器（後期、晚期）
37	古屋敷	散布地	縄文、平安	縄文土器（前期～後期）、土師器
38	開沢口	集落跡	縄文、平安、近世	縄文土器（中期、後期）、墓塚、網被り人骨
39	石神Ⅴ	散布地	縄文	縄文土器
40	石神Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器（前期）
41	石神Ⅳ	散布地	縄文	縄文土器（後期、晚期）
42	石神Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器（前期末）
43	北の城館跡	城館跡、集落跡	平安、中世	縄文土器、堅穴住居跡（平安、中世）、堀跡
44	八幡前跡	城館跡、散布地	縄文、中世	縄文土器（前期、中期）、平塁、土坑、土塁、堀跡
45	石神Ⅱ	散布地	縄文～近世	縄文土器、焼成品、占鉢
46	山口	散布地	縄文	縄文土器（後期、晚期）、石器
47	岩原	散布地	縄文	縄文土器
48	日影Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器

番号	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物等
49	鰐沢 I	散布地	縄文	縄文土器（中期）
50	日影 I	散布地	縄文	縄文土器
51	日影 II	散布地	縄文	縄文土器
52	鰐沢 II	散布地	縄文	縄文土器
53	湯の沢IV	散布地	縄文	縄文土器
54	湯の沢II	集落跡	縄文	縄文土器（中期、後期）
55	湯の沢III	集落跡	縄文、近世	縄文土器（中期、後期、晚期）
56	湯の沢I	集落跡	縄文	縄文土器（中期、後期）
57	五日市館	城郭跡	中世	平堀、空堀
58	貝名市館	城館跡	中世	
59	貝名市 I	散布地	縄文	縄文土器
60	有矢野館	城郭跡、散布地	縄文、中世	縄文土器（後期）、空堀、半堀、土師器
61	有矢野	集落跡、キャンプ	縄文、古代	縄文土器（早期、前期、中期、後期）
62	保土坂	集落跡	縄文	縄文土器
63	上の山X	散布地	縄文、古代	縄文土器、古代
64	上の山Y	散布地	縄文、古代	縄文土器（中期、後期）、古代土器
65	上の山Z	散布地	縄文	縄文土器（後期）、剥片石器
66	上の山Y	散布地	縄文	縄文土器（中期、後期）、江戸（スリバチ）
67	上の山館	城郭跡、集落跡	縄文、古代	縄文土器（中期）
68	荒屋一里塚	一里塚	近世	
69	保土沢	散布地	古代	土師器
70	荒屋館	散布地	縄文	縄文土器、土師器
71	瀬戸谷地窯	窯跡	近世	近世陶器
72	荒屋II	散布地	縄文	縄文土器（前期、中期）
73	荒屋 I	散布地	縄文	縄文土器（前期、中期）

III 野外調査と室内整理の方法

1. 野外調査

(1) グリッドの設定

基準点測量を委託し、公共座標軸を利用して調査区を設定した。調査区域南西部に基準点1を、中央部に基準点2をそれぞれ設定した。基準点の成果値（日本測地系）は以下の通りである。

基準点1 X=13,148.000 Y=21,940.000 H=290.612m

基準点2 X=13,184.000 Y=21,980.000 H=289.562m

基準点1から西に36m進み、更に北へ128m進んだ点を原点とした。原点から東一西、南一北に平行ないし直行するように40m毎に区切り、大区画とした。大区画を更に4m毎に区切り、小区画とした。

グリッドの名称は南北方向はアルファベット、東西方向は数字を用い、その組み合わせによった。大グリッド名は大文字のアルファベットとローマ数字、小グリッド名は大グリッド名を冠した後、小文字のアルファベットと算用数字を用いて、A I b 2のように表した。

(2) 粗掘り・遺構検出

調査区域内の数か所にトレッチを入れて検出面までの深さや層序の確認をした後、表土の除去は重機で行った。遺構検出面までの上層の除去は人力で行った。遺構の検出面はⅢ層下部及びⅣ層である。検出された遺構には検出順に1号住居跡のように命名した。

(3) 遺構の精査・出土遺物の取り上げ

遺構の精査は竪穴住居跡・住居状遺構を4分法、土坑・柱穴状遺構を2分法、溝跡・堀跡については数か所に土層確認のためのベルトを残して掘り下げた。精査の各段階で図面の作成や写真撮影等必要な記録をとった。出土遺物の取り上げは、遺構内のものは遺構名、遺構外のものは小グリッド単位で層位を記入して取り上げた。

(4) 実測

実測は簡易造り方測量を行った。実測図は原則として20分の1の縮尺で平面図・断面図を作成したが、住居跡のカマドなどの細部については10分の1、堀跡の平面図については40分の1の縮尺で図面を作成した。

(5) 写真撮影

写真撮影には、 $6 \times 7\text{ cm}$ モノクロ1台、35mm判のモノクロとカラーリバーサル各1台を使用し、遺構の平面・断面と遺物の出土状況を中心に撮影した。

2. 室内整理

(1) 作業手順

遺構については、現地で作成した実測図の点検、合成、第2原図の作成、トレース、図版作成の順に進めた。遺物については、接合、復元、仕分け、登録を行った後、原則として実測図の作成、トレース、写真撮影、図版作成の順に進めた。

(2) 遺構図版・遺物図版

本報告書に掲載した遺構図版の縮尺は以下のとおりである。

- ・竪穴住居跡、住居状遺構の平面図・断面図……1/60 カマドの断面図……1/30
- ・土坑、柱穴状小土坑の平面図・断面図……1/40
- ・溝跡の平面図……1/40 断面図……1/40
- ・堀跡の平面図……1/80, 1/160 断面図……1/40, 1/80

また、遺物図版の縮尺は、土器は1/2又は1/3、柘木は1/3、石器・鉄製品は1/2である。遺物写真は原則として1/3の縮尺を用いたが、これに該当しないものには縮尺率を別に付してある。遺構やその他の写真の縮尺は不定である。なお、遺物図版掲載番号と写真図版掲載番号とは統一してある。

遺構図版における土層断面図には、層位ごとに数字を付して色調、土性、混入物等を記してある。遺構図版・遺物図版を作成するにあたり、使用したスクリーントーンの種別と土器実測図の凡例は第5図のとおりである。

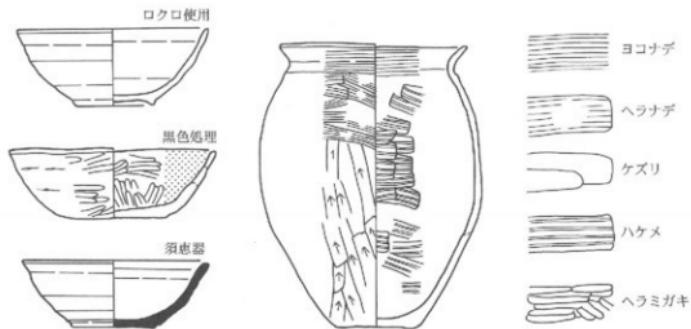


燒土

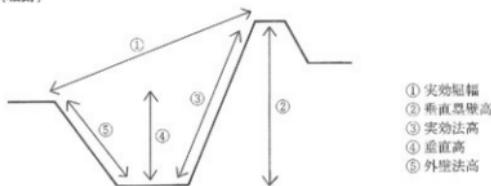
Pm 十和田山降下火山灰

S 種

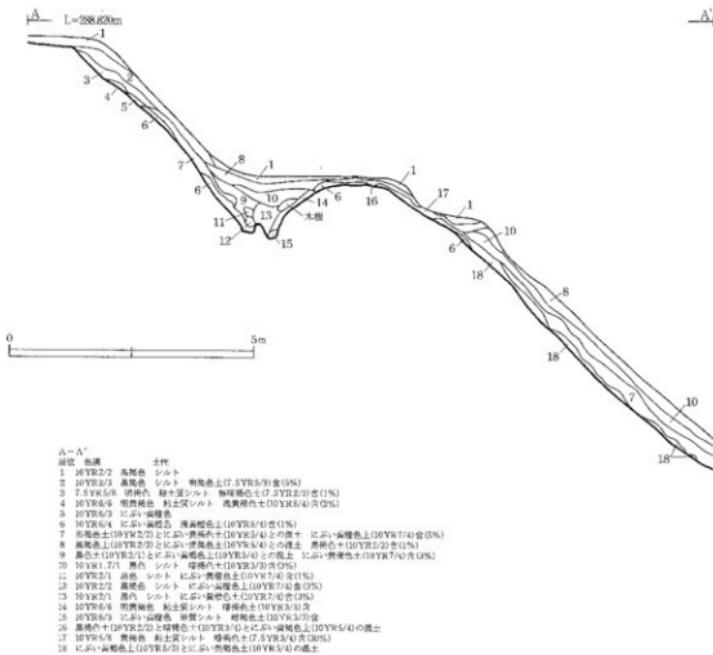
P 土器



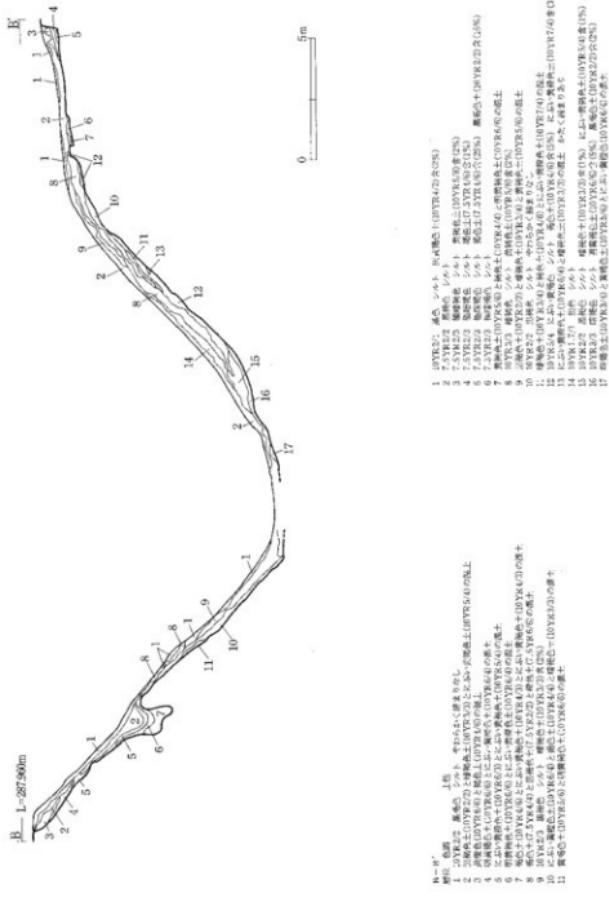
〈堀跡〉



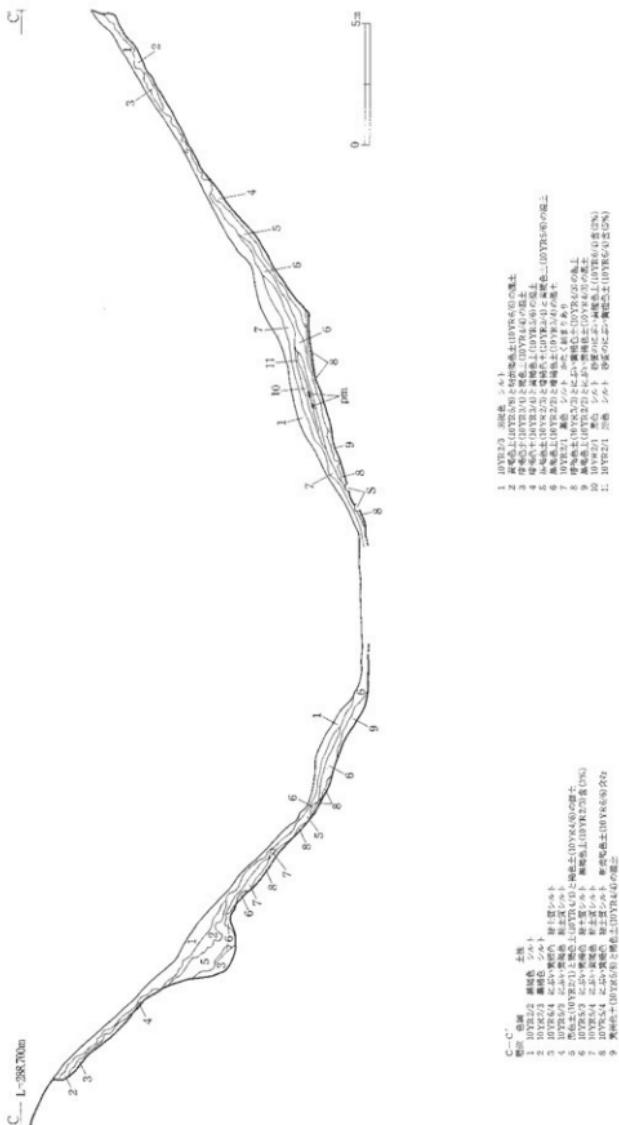
第5図 スクリーントーン・土器実測図凡例



第6図 郭斜面断面図(1)



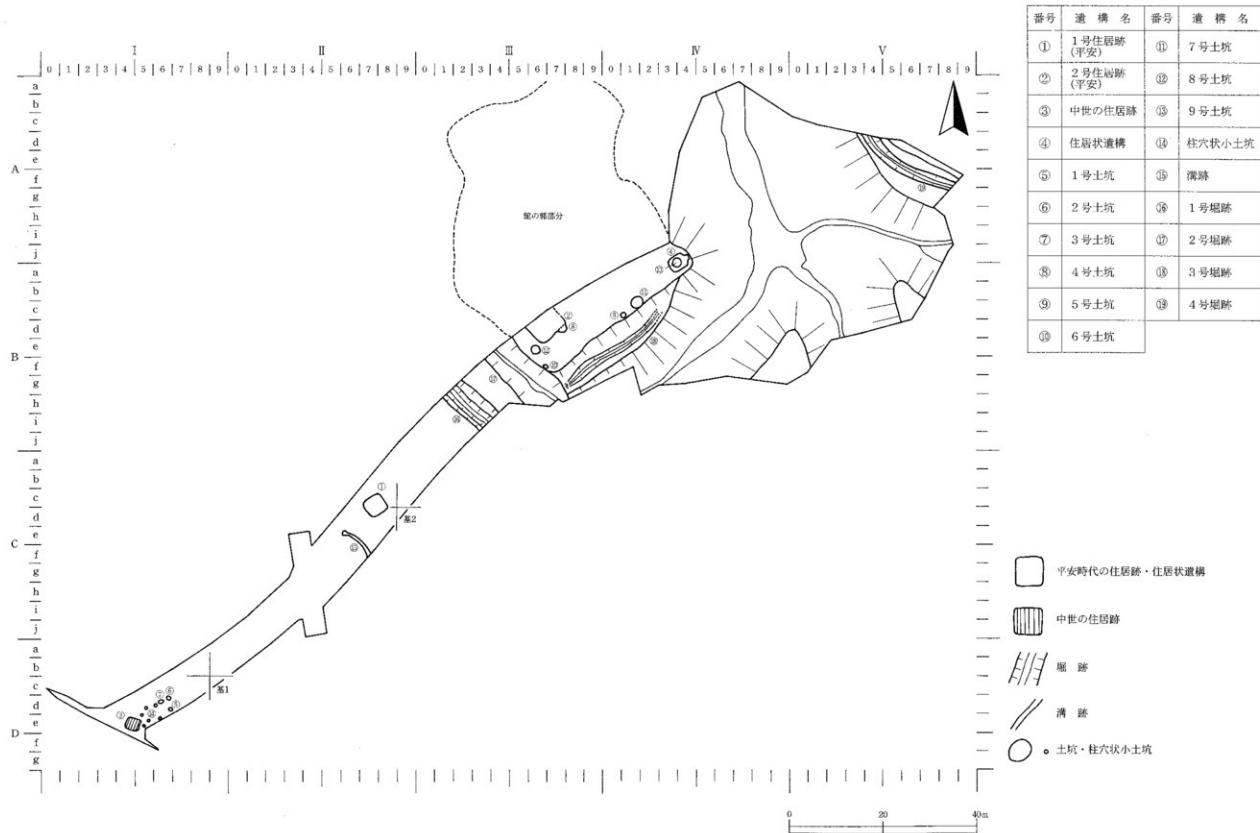
第7図 部斜面断面図(2)



第8図 郷斜面断面図(3)



第9図 地形測量図



第10図 北の城館跡遺構配置図

IV 検出された遺構と出土遺物

検出された遺構は、平安時代の堅穴住居跡（2棟）、中世の堅穴住居跡（1棟）、住居状遺構（1棟）、土坑（9基）、柱穴（6基）、溝跡（1条）、堀跡（4条）である。出土した遺物は、縄文土器、石器、土師器、須恵器、鉄製品である。

1. 平安時代の堅穴住居跡

1号住居跡

遺構（第11図、写真図版6）

＜位置・検出状況＞ 調査区域中央部グリッドC II c 7・c 8・d 7・d 8に位置する。I層下部からII層上部にかけて黒褐色土と黄褐色土の混土の広がりとして確認され、床面と掘り方のみの検出である。

＜重複関係＞ なし。

＜平面形・規模＞ 平面形は隅丸方形で、規模は4.3×4.45mである。

＜埋土＞ 11層に細分される。黒褐色土と黄褐色土の混土が主体で、締まりがなく、粘性は弱い。木根による搅乱を受けている。

＜壁＞ 掘り方のみの検出であり、壁高は不明であるが、南東壁及び南北壁が他より深く掘り込まれている。

＜床面＞ 黄褐色土である。少し凹凸があるが、ほぼ平坦である。全体に締まりに欠け、粘性も弱い。

＜柱穴・土坑＞ P 1～P 4まで4個検出された。平面形はほぼ円形で、規模は径26×30cm～34×37cm、深さ56.5～72.5cmである。埋土は黄褐色土粒を含んだ黒褐色土や暗褐色土である。この4個が主柱穴と考えられる。柱穴計測値は次の表の通りである。

柱穴計測表

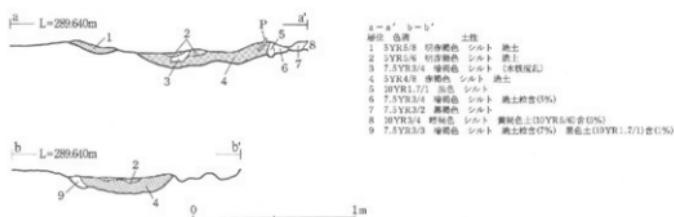
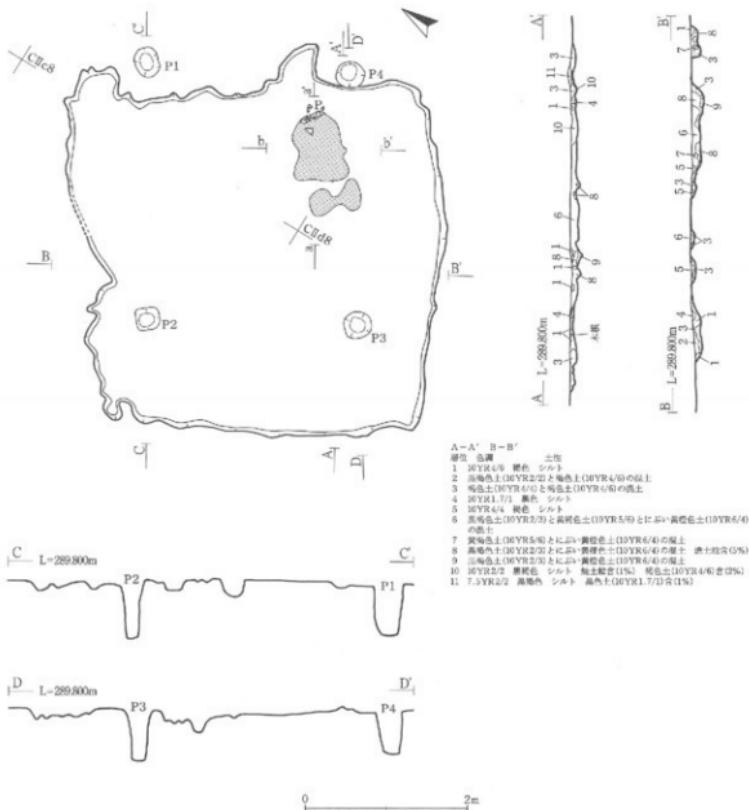
単位：cm

番号	P 1	P 2	P 3	P 4
径	28×38	26×30	33×33	34×37
深さ	63.7	72.5	63.1	56.5

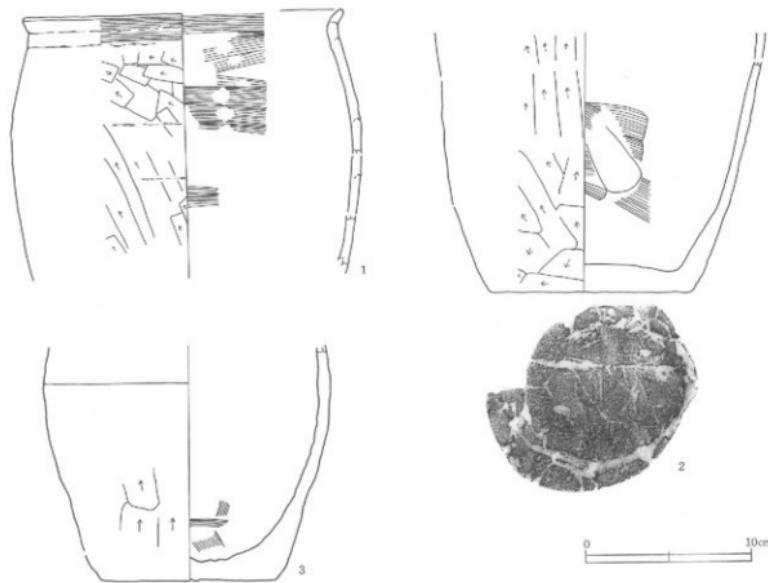
＜カマド＞ 北東壁南東寄りに構築されていたと考えられ、燃焼部の焼土だけが残存している。焼土は2カ所検出された。規模・形状は、壁の近くで検出された焼土が径65×82cmの不整形で厚さ10cm、もう一つは径39×65cmの不整形で厚さ4cmである。どちらの焼土もよく焼成している。

遺物（第12図、写真図版19）

土器1～3が出土している。ロクロ不使用の土師器甕である。1は体部上半部に体部最大径を持つと考えられる。口縁部は約1cmで、頸部から外反している。胎土には径1～4mmの砂粒を多量に含んでいる。内面は頸部から口縁部にかけて煤け、炭化物が付着している。2は底部から僅かに外傾して立ち上がっており、内外両面とも摩耗しており、調整ははっきりしない。外面は一部煤けており、底部には木葉痕が残っている。3は底部から外傾して立ち上がっており、10cm位から僅かに内湾している。外面は煤け、全体が摩耗しており、調整ははっきりしない。いずれもカマド跡の焼土上からの出土である。



第11図 1号住居跡



第12図 1号住居跡出土遺物

時期

出土遺物から平安時代と考えられる。

2号住居跡

遺構（第13図、写真図版7・8）

＜位置・検出状況＞ 調査区域グリッドB III d 6・c 7・d 7にまたがって位置する。III層面で黒色土の広がりとして検出された。遺構の北西側半分は調査区域外に延びており、北東部の一部は搅乱されている。

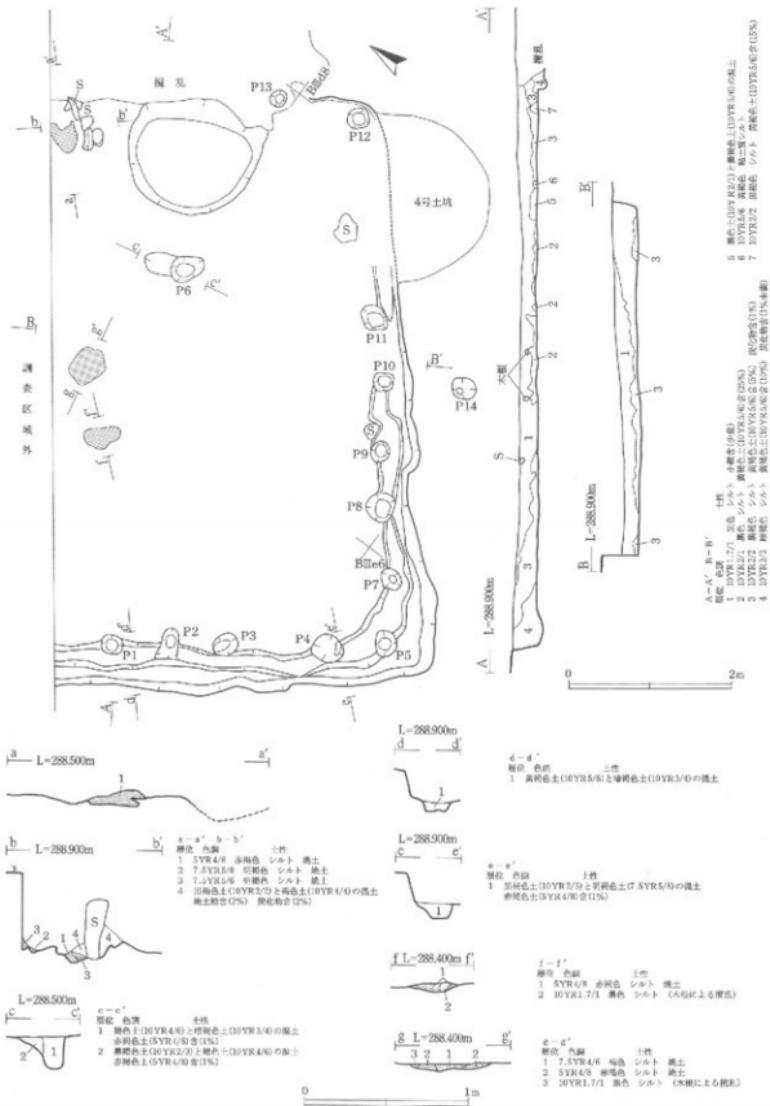
＜重複関係＞ 南西部の床面下から4号土坑が検出されている。

＜平面形・規模＞ 平面形は卵円形で、規模は $(4.7) \times 7.2\text{m}$ と推定される。

＜埋土＞ 7層に細分される。黒色土が主体で、全体によく縮まり、粘性もある。

＜壁＞ ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は $28.4\sim47.6\text{cm}$ で、南西壁が最も高い。北東壁は搅乱され残存しない。

＜床面＞ 黄褐色土である。凹凸が少なく平坦で、全体によく縮まっている。中央部で焼土を2ヵ所検出している。1ヵ所は径 $38\times47\text{cm}$ の不整形で、厚さは4cm。もう1ヵ所は径 $26\times45\text{cm}$ の不整形で、厚さは5cmである。いずれも性格は不明である。



第13図 2号住居跡

＜壁溝＞ 南西壁際及び南東壁際に壁溝が巡っている。規模は上幅20~47cm、下幅12~30cm、深さ4.3~17.2cmである。なお、本壁溝は南東壁際のP10とP11の間では確認されない。

＜柱穴・土坑＞ P1~P14の14個検出された。壁際からの検出がほとんどである。平面形は円形や隅丸方形で、規模は径18×22cm~35×39cm、深さ17.8~70cmである。P10、P11付近は出入り口の可能性がある。

柱穴計測値は次の表の通りである。

柱穴計測表

単位: cm

番号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8	P 9	P 10
径	23 × 27	25 × 37	26 × 32	35 × 39	26 × 32	30 × 42	24 × 30	33 × 36	23 × 26	23 × 24
深さ	41.8	35.8	34.1	39.2	59	41	35.6	68.2	17.8	59.4

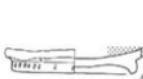
番号	P 11	P 12	P 13	P 14
径	27 × 31	25 × 27	18 × 22	26 × 30
深さ	70	—	23	21.9

＜カマド＞ 北東壁中央部に設置されていたものと考えられる。本体及び煙道部は搅乱され、袖部の一部と芯材として使用された礫が5個残存するのみである。燃焼部の焼土は径30×45cmの不整形に広がり、厚さは10cmでよく焼成している。

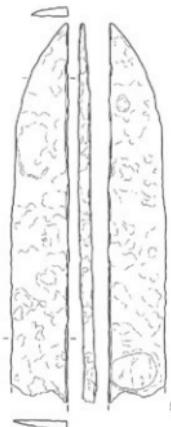
遺物（第14図、写真図版19）

土器4と鉄製品5が出土している。

4は土師器坏である。高さ5mmの高台がついており、台部外面には、幅1mm、長さ3mmの刻みが1cm間隔で施されている。内面は黒色処理されており、底部外面は焼けている。時期は10世紀頃と考えられる。



5は刀剣である。平造りと考えられ、棟は角棟である。残存長23cm、幅3.4cm、厚さ6mmである。



4は床直上、5は南東壁際の床直上からの出土である。



時期

出土遺物が2点であり、詳しい時期を特定することはできないが、周辺から10世紀頃の土師器坏が出土していることから、本遺構も同時期と考えられる。

第14図 2号住居跡出土遺物

2. 中世の堅穴住居跡

遺構（第15図、写真図版9）

＜位置・検出状況＞ 調査区域南西部隅グリッドD I e 4・e 5に位置する。II層面で黒色土と黄褐色土の混土の広がりとして検出された。

＜重複関係＞ なし。

＜平面形・規模＞ 平面形は隅丸方形で、規模は3.0×3.1mである。

＜埋土＞ 9層に細分される。黒色土と黄褐色土の混土が主体で、全体に縮まりに欠ける。

＜壁＞ ほぼ垂直気味に立ち上がっている。壁高は14.1～31.6cmである。南東壁の一部は張り出しており、出入り口の可能性がある。

＜床面＞ 黄褐色土である。凹凸があるが平坦でよく縮まっている。

＜柱穴・土坑＞ P 1～P 12の12個検出された。平面形は円形・楕円形・隅丸方形で、規模は径20×22cm～50×57cm、深さ9.4～65.9cmである。柱穴計測値は次の表の通りである。

柱穴計測表

単位：cm

番号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8	P 9	P 10
径	30×43	20×22	25×30	30×32	29×35	28×31	28×38	28×30	27×30	50×57
深さ	60.6	28.2	23.6	57.3	65.9	58.7	59.8	58.8	64.6	9.4

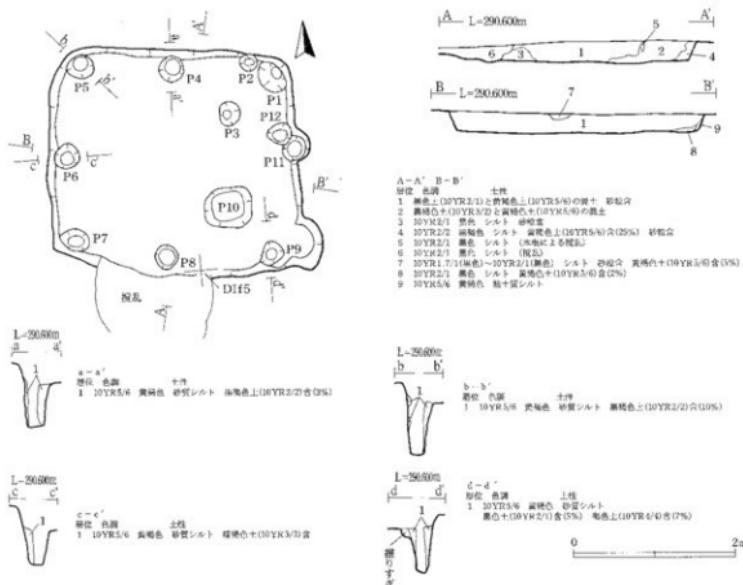
番号	P 11	P 12
径	28×31	26×30
深さ	45.8	50

遺物

出土遺物はない。

時期

出土遺物はなく、詳しい時期は特定できないものの類例から中世と思われる。



第15図 中世の堅穴住居跡

3. 住居状遺構

遺構 (第16図、写真図版10)

＜位置・検出状況＞ 調査区域中央部から北東部グリッドAIV j 3・j 4、BIV a 3・a 4にまたがって位置する。館跡の郭の平場隅からの検出である。III層面で、黒色土の広がりとして検出された。

＜重複関係＞ 床面から9号土坑が検出されている。

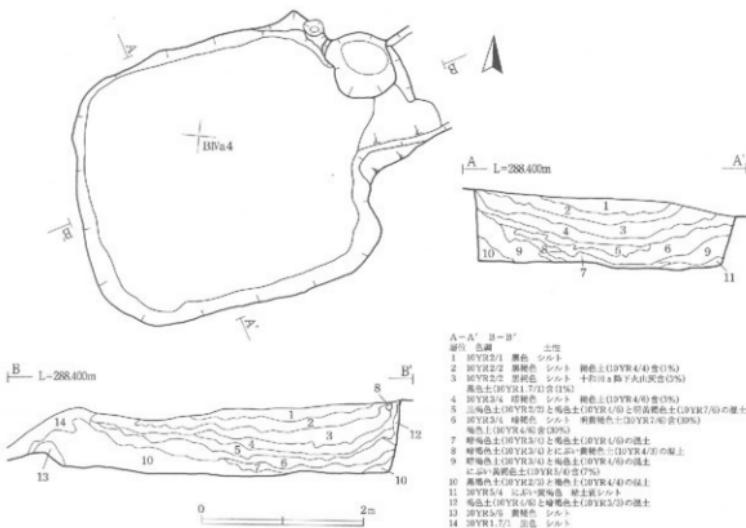
＜平面形・規模＞ 平面形は隅丸方形で、規模は3.2×3.56mである。

＜埋土＞ 14層に細分される。黒色土や黒褐色土が主体で、全体に縦まりに欠ける。3層には十和田a降下火山灰が含まれている。

＜壁＞ ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は40~91.6cmで、西壁と北壁が高い。北東壁の一部が張り出しており、出入り口の可能性がある。

＜床面＞ 明黄褐色土で、やわらかくやや縦まりに欠ける。凹凸がなく、ほぼ水平で平坦である。

＜柱穴・土坑＞ 検出されなかった。



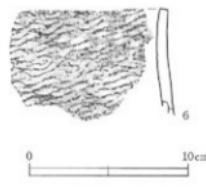
第16図 住居状遺構

遺物（第17図、写真図版19）

土器6が出土している。壇土中部からの出土で、流れ込みと考えられる。縄文時代前期初頭の深鉢の口縁部で、撻糸文が施されている。内外両面とも焼けている。

時期

壇土に十和田a降下火山灰が含まれていることから平安時代と考えられる。ただし、火山灰は二次堆積の可能性が考えられることと壇の一部が張り出していることから、中世の造構の可能性も否定できない。



第17図 住居状遺構出土遺物

4. 土坑

1号土坑（第18図、写真図版11）

＜位置・検出状況＞ 調査区域南西部隅グリッドD I d 6に位置する。I層下部からII層上部にかけてにぶい黄褐色土粒を含む黒色土の広がりとして検出された。

＜平面形・規模＞ 平面形は楕円形で、規模は開口部径51×66cm、底部径30×50cm、深さは最深部で34.1cmである。

＜壁・底面＞ 壁は外傾して立ち上がっている。壁高は30.4～34.1cmで、北西壁が最も高い。底面は黄褐色土で、凹凸があるが、よく縮まっている。

＜埋土＞ 4層に分けられる。にぶい黄褐色土粒を含む黒色土が主体である。全体に縮まっている。

＜遺物・時期＞ 出土遺物はなく、時期は不明である。

2号土坑（第18図、写真図版11）

＜位置・検出状況＞ 調査区域南西部隅グリッドD I d 6に位置する。I層下部からII層上部にかけてにぶい黄褐色土粒を含む黒色土の広がりとして検出された。

＜平面形・規模＞ 平面形は楕円形で、規模は開口部径60×77cm、底部径47×67cm、深さは最深部で40.6cmである。

＜壁・底面＞ 壁はほぼ垂直気味に立ち上がっている。壁高は37.8～40.6cmで、西壁が最も高い。底面は黄褐色土で、凹凸があるがよく縮まっている。

＜埋土＞ 図化は省略したが、にぶい黄褐色土粒を含む黒褐色土が主体である。

＜遺物・時期＞ 出土遺物はなく、時期は不明である。

3号土坑（第18図、写真図版11）

＜位置・検出状況＞ 調査区域南西部隅グリッドD I d 5に位置する。I層下部からII層上部にかけて黒褐色土の広がりとして検出された。

＜平面形・規模＞ 平面形は楕円形で、規模は開口部径55×66cm、底部径36×51cm、深さは最深部で60.7cmである。

＜壁・底面＞ 北東壁は垂直に、他は僅かに外傾して立ち上がっている。壁高は56.6～60.7cmで南東壁が最も高い。底面は黄褐色土で、凹凸があるがよく縮まっている。

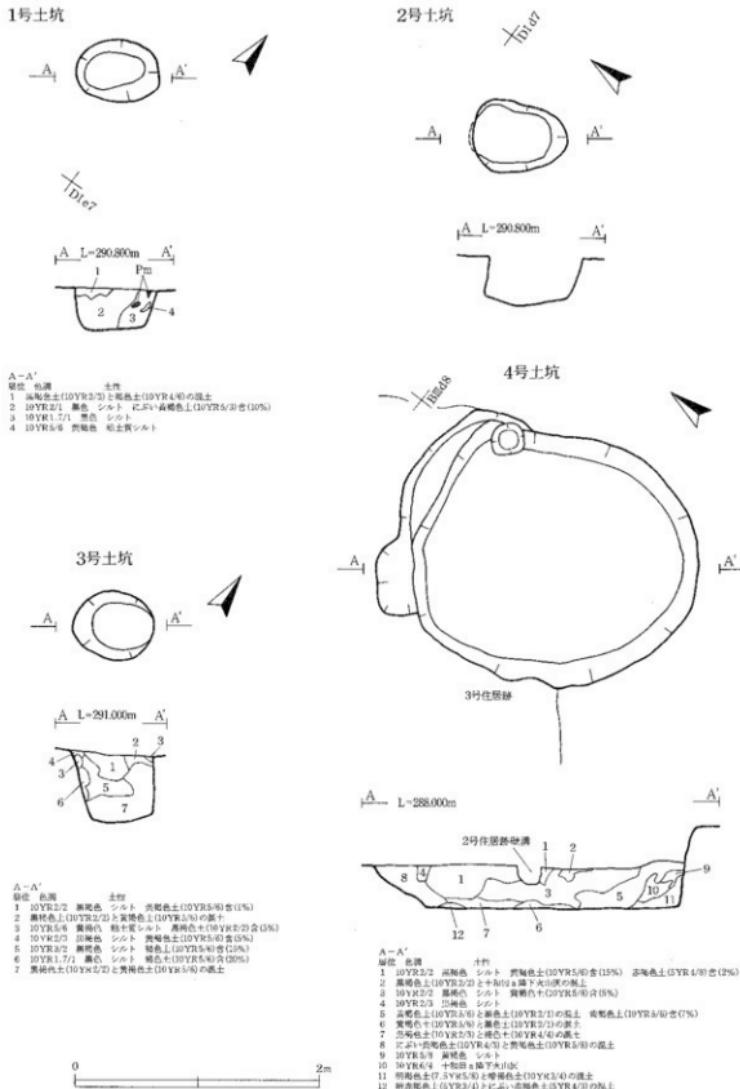
＜埋土＞ 7層に細分される。黒褐色土が主体で、よく縮まっている。

＜遺物・時期＞ 出土遺物はなく、時期は不明である。

4号土坑（第18図、写真図版11）

＜位置・検出状況＞ 調査区域中央部グリッドB III d 7・d 8に位置する。2号住居跡精査中に南東壁際の床面から検出された。

＜平面形・規模＞ 平面形は楕円形で、規模は開口部径2.0×2.05m、底部径1.7×2.1m、深さは最深部で65cmである。



第18図 1号・2号・3号・4号土坑

＜壁・底面＞ 壁はほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は32.3～65cmで、東壁が最も高い。底面は黄褐色土で、凹凸があるがよく縮まっている。

＜埋土＞ 12層に細分される。黄褐色土粒を含む黒褐色土が主体で、全体にやわらかいが縮まりがある。

＜遺物・時期＞ 出土遺物はない。検出状況から平安時代もしくはそれ以前の可能性がある。

5号土坑（第19図、写真図版11）

＜位置・検出状況＞ 調査区域中央部グリッドB IV c 1に位置する。III層下部で黒色土の広がりとして検出された。

＜平面形・規模＞ 平面形は隅丸方形で、規模は開口部径1.1×1.24m、底部径80×90cm、深さは最深部で42.5cmである。

＜壁・底面＞ 壁は外傾して立ち上がっている。壁高は17.3～42.5cmで、北壁が最も高い。底面は黄褐色土で、凹凸があり縮まりに欠ける。

＜埋土＞ 6層に細分される。黒色土が主体で、全体に縮まりに欠ける。

＜遺物・時期＞ 出土遺物はなく、時期は不明である。

6号土坑（第19図、写真図版12）

＜位置・検出状況＞ 調査区域中央部グリッドB III f 7に位置する。III層下部で黒褐色土と褐色土の混土の広がりとして検出された。

＜平面形・規模＞ 平面形はほぼ円形で、規模は開口部径1.0×1.12m、底部径70×80cm、深さは最深部で49.1cmである。

＜壁・底面＞ 壁は外傾して立ち上がっている。壁高は20.7～47.2cmで、北壁が最も高い。底面は黄褐色土で、少し凹凸があり縮まっている。

＜埋土＞ 3層に細分される。黒褐色土と褐色土の混土が主体で、縮まりがあるが、粘性は弱い。

＜遺物・時期＞ 出土遺物はなく、時期は不明である。

7号土坑

遺構（第19図、写真図版12）

＜位置・検出状況＞ 調査区域中央部グリッドB IV b 1・b 2・c 1・c 2にまたがって位置する。III層下部で黒色土の広がりとして検出された。

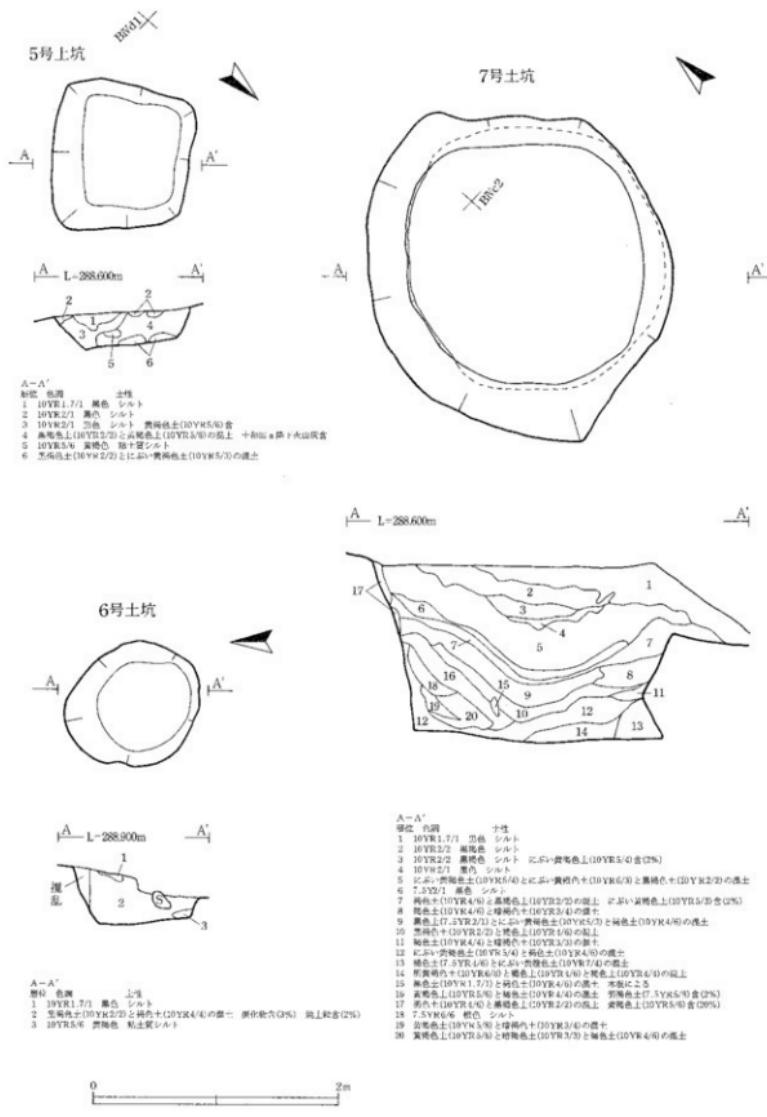
＜平面形・規模＞ 平面形はほぼ円形で、規模は開口部径2.5×2.65m、底部径2.1×2.15m、深さは最深部で143.8cmである。

＜壁・底面＞ 北東壁は底面から垂直気味に立ち上がり、20cm位から外傾して立ち上がっている。他は底面から20cm位まで内溝して立ち上がってフラスコ状になり、その後外傾している。壁高は75.5～143.8cmである。底面は明黄褐色土でよく縮まり、凹凸がなく平坦である。

＜埋土＞ 20層に細分される。黒色土や黒褐色土が主体で、全体によく縮まっている。

遺物（第20図、写真図版19）

土器7が埋土中部の壁際から出土している。ロクロ使用の土師器壺である。体部は底部から1cm位直立し



第19圖 5号・6号・7号土坑

て立ち上がってから大きく外傾している。内外両面ともミガキが施され、内面は黒色処理されている。船底には径1mmの砂粒を含み、外面は焼けている。底部切り離しは回転糸切りである。

時期

出土遺物から平安時代（10世紀頃）と考えられる。

8号土坑（第21図、写真図版12）

＜位置・検出状況＞ 調査区域中央部グリッドB III e 6に位置する。III層下部で黄褐色土粒を含む暗褐色土の広がりとして検出された。

＜平面形・規模＞ 平面形は梢円形で、開口部径1.9×2.3m、底部径1.55×2.0m、深さは最深部で37.8cmである。

＜壁・底面＞ 壁は外傾して立ち上がっていている。壁高は22.4～30.5cmで、東壁が最も高い。底面は黄褐色土でよく縮まり、少し凹凸があるがほぼ平らである。

＜埋土＞ 7層に細分される。黑色土や暗褐色土が主体で、よく縮まっている。

＜遺物・時期＞ 出土遺物はなく時期や性格は不明である。

9号土坑（第21図、写真図版12）

＜位置・検出状況＞ 調査区域中央部から北東部グリッドA IV j 3・j 4、B IV a 3・a 4にまたがって位置する。住居状遺構の底面を精査中、明黄褐色土の広がりとして検出された。

＜平面形・規模＞ 平面形は円形で、開口部径2.1×2.15m、底部径2.0×2.02m、深さは最深部で59cmである。

＜壁・底面＞ 壁はほぼ垂直に立ち上がってている。壁高は47.5～59cmで、西壁が最も高い。底面は黄褐色土でかたく縮まり、凹凸が少なく、ほぼ平坦である。

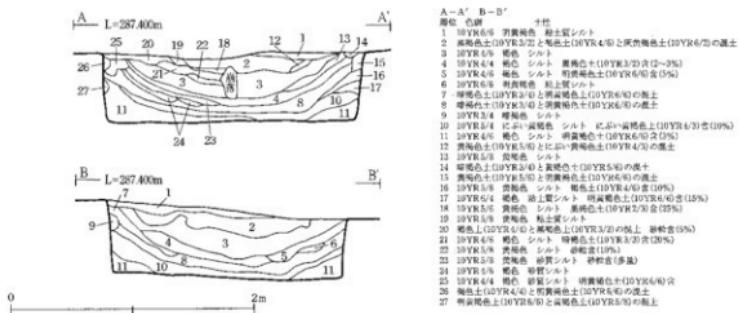
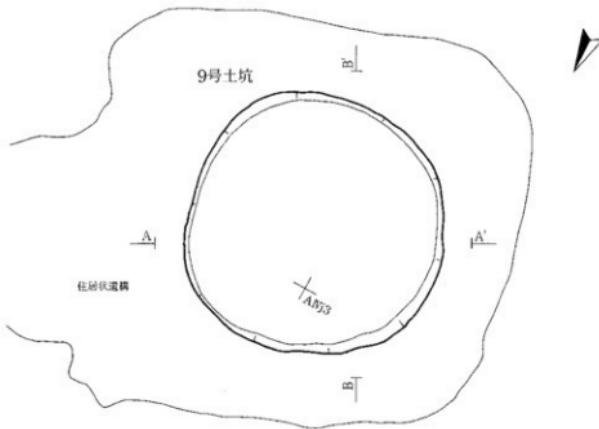
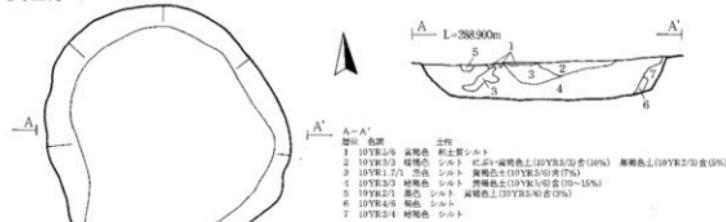
＜埋土＞ 27層に細分される。全体に縮まりに欠け、粘性は弱い。

＜遺物・時期＞ 出土遺物はない。住居状遺構の底面から検出されたことから、平安時代もしくはそれ以前の可能性がある。



第20図 7号土坑出土遺物

8号土坑



第21図 8号・9号土坑

5. 柱穴状小土坑

遺構（第22図、写真図版13）

調査区域南西部グリッドD I d 5・d 6・e 5・e 6にまたがって、6基検出された。平面形は円形や精円形で、規模は径39×41cm～43×52cm、深さ29.6～68.2cmである。埋土は黒色土や黒褐色土が主体で、やわらかいがよく縮まっている。柱穴配置に規則性はない。柱穴計測値は次の表の通りである。

柱穴計測表

単位：cm

番号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
径	46×47	42×45	40×54	41×46	39×41	43×52
深さ	29.6	38.4	68.2	58.8	67.9	61.4

＜遺物・時期＞ 出土遺物はなく、時期や性格については不明である。

6. 溝跡

遺構（第23図、写真図版14）

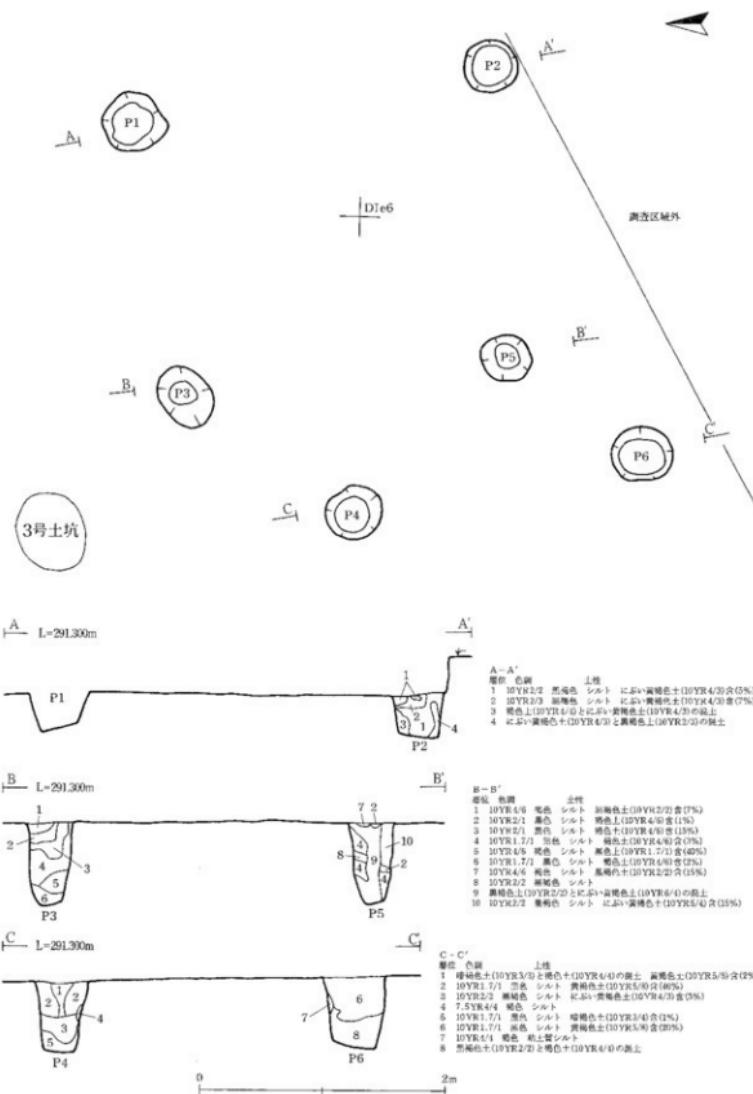
＜位置・検出状況＞ 調査区域中央部グリッドC II e 6・e 7・f 7にまたがって位置する。I層下部からII層上部にかけて暗褐色土の広がりとして検出された。

＜規模・平面形＞ グリッドC II e 6から南東に延び、南東端はグリッドC II f 7で調査区域外へ延びている。全長は7.5m、上端幅25～60cm、下端幅13～48cm、深さ7.2～32.2cmである。

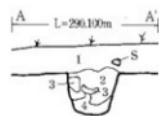
＜断面形・壁・底面＞ 断面形はU字状で、壁は外傾して立ち上がっている。底面は黄褐色土で堅く縮まっているが、木根等により凹凸が大きい。

＜埋土＞ 十和田a降下火山灰を含む暗褐色土や褐色土が主体で、全体に縮まりに欠ける。

＜遺物・時期＞ 出土遺物はなく、また、埋土上部の十和田a降下火山灰は二次堆積の可能性もあることから、時期は特定できない。



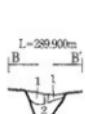
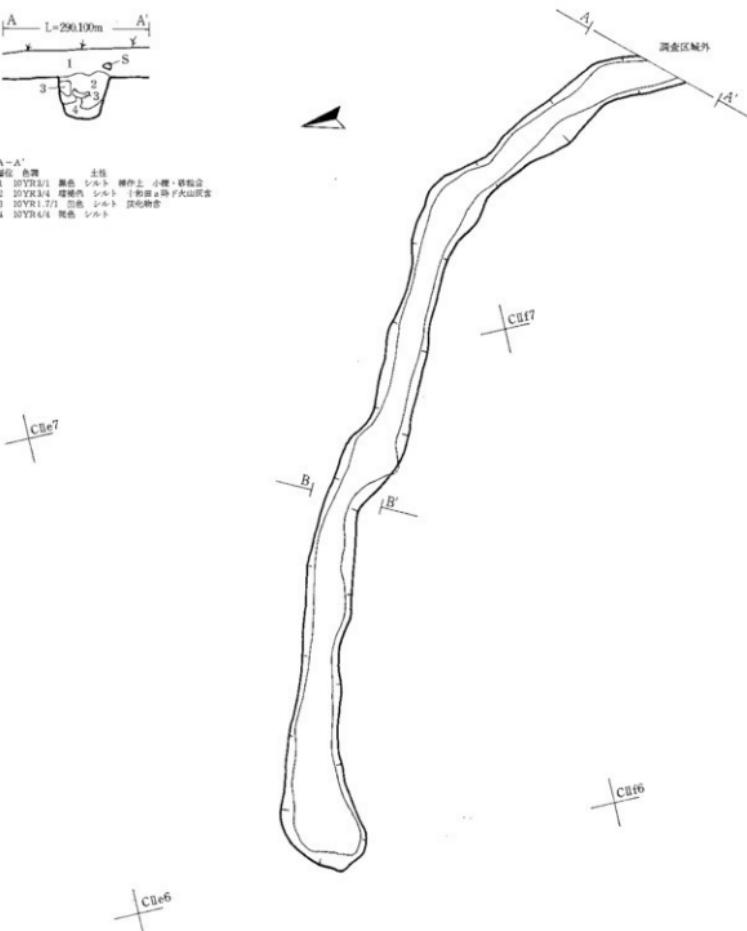
第22図 柱穴状小土坑



A-A'

断面・色調

- 1 10YR1.4/1 黒色 シルト 墓地土 小便・糞便含
- 2 10YR3.4/4 雜褐色 シルト トモロア跡 大山灰含
- 3 10YR1.7/1 黑色 シルト 硝化物含
- 4 10YR4/4 黑色 シルト



B-B'

断面・色調

- 1 10YR3.4/4 雜褐色 シルト トモロア跡 大山灰含
- 2 10YR4/4 黑色 シルト



第23図 溝 跡

7. 堀跡

1号堀跡

遺構（第25図、写真図版15）

＜位置・検出状況＞ 調査区域中央部グリッドB III h 2・h 3・i 2・i 3にまたがって位置する。II層上部で黒色土の広がりとして検出された。

＜規模・平面形＞ 北西-南東に延びており、両端は調査区域外である。規模は全長9.3m、上幅5.05m～5.6m、下幅62cm～98cm、深さ148.9～200.5cmである。

＜断面形・壁・底面＞ 断面形は薬研堀である。壁は外傾しながら立ち上がっており、北東壁は1m位から、南西壁は1.45m位からそれぞれ大きく外傾している。底面は黄褐色土で、ほぼ平らであり、堅く縮まっている。

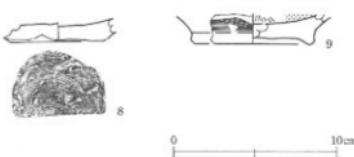
＜埋土＞ 32層に細分される。上部は黒色土、中～下部は黒褐色土が主体である。全体にやわらかく、縮まりに欠ける。

遺物（第24図、写真図版19）

土器8・9が埋土上部から検出されている。

8はロクロ使用の土師器壺の底部である。底部部切り離しは回転糸切りで、内面は一部煤けている。

9は土師器高台付壺の底部から体部下端部である。高台部は「八」の字状に開いている。内面はミガキ後黒色処理されている。底部切り離しは回転糸切りである。どちらも埋土上部からの出土であり、流れ込みと考えられる。



第24図 1号堀跡出土遺物

2号堀跡

遺構（第26図、写真図版16）

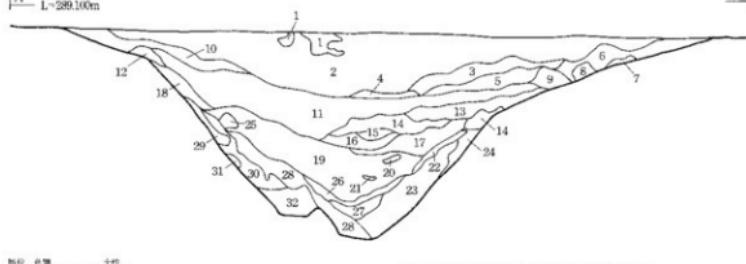
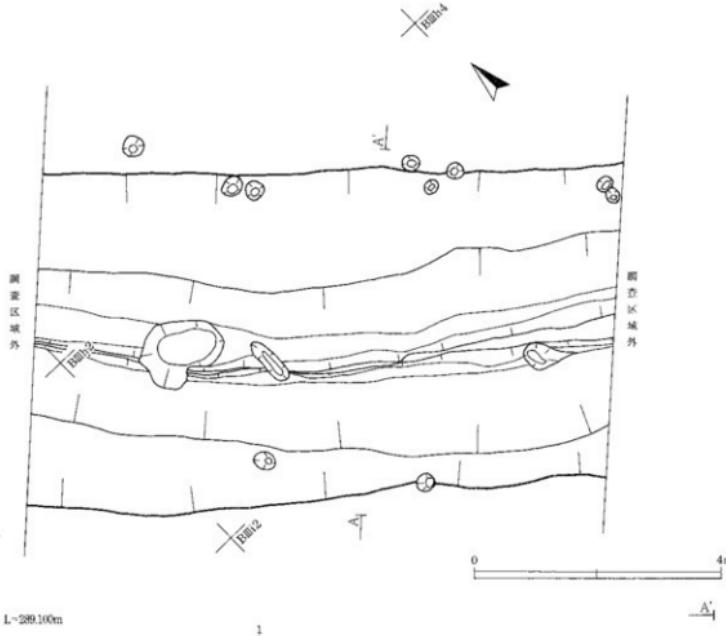
＜位置・検出状況＞ 調査区域中央部グリッドB III f 4・f 5・f 6・f 7・g 5・g 6・g 7にまたがって位置する。調査当初から、幅6m、深さ1.5～1.8mの細長い窪みとして確認されていたものである。

＜平面形・規模＞ 北西-南東に延びており、両端は調査区域外である。規模は全長15.5m、上幅6.0～8.7m、下幅10～48cm、深さ235.5～410.6cmである。

＜断面形・壁・底面＞ 断面形は薬研堀である。壁は外傾しながら立ち上がっている。底面は黄褐色土で、堅く縮まっている。

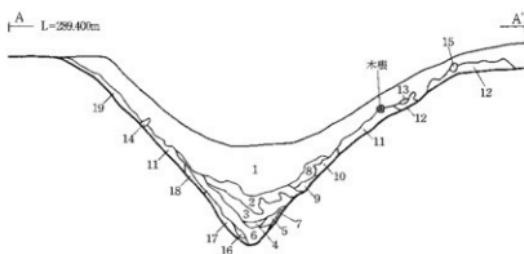
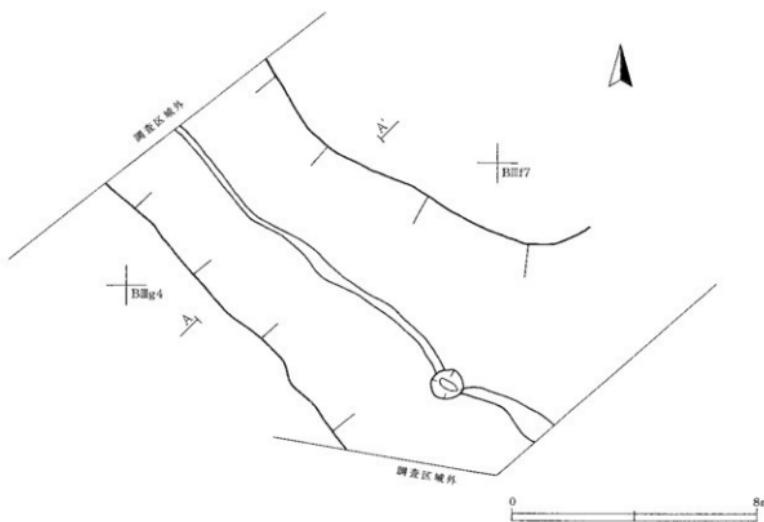
＜埋土＞ 19層に細分される。黒色土～黒褐色土が主体で、全体によく縮まっている。

遺物 出土遺物はない。



- | 部位 | 位置 | 土壤性状 |
|----|--|--|
| 1 | 30YR2/3 黑褐色 シルト | 18 30YR2/2 黑褐色 シルト 青紫色土(30YR5/6)含(10%) |
| 2 | 10YR1.7/1 黄色 シルト | 19 10YR1.7/1 黄色 シルト 青紫色土(30YR6/6)含(1%) |
| 3 | 10YR1.7/1 黄褐色 シルト | 20 10YR1.7/1 黄褐色 シルト 黄褐色土(30YR3/2)含(30%) |
| 4 | 10YR2/2 黑褐色 シルト SYR5/5/0の混合土 | 21 10YR2/2 黑褐色 シルト |
| 5 | 10YR2/2 黄褐色 シルト 新黃褐色土(10YR5/9)含(10%) | 22 10YR2/1 (D)YR2/1と海褐色土(10YR4/6)の層土 |
| 6 | 10YR2/3 黑褐色 シルト 新黃褐色土(10YR5/9)含(10%) | 23 10YR4/6 黄褐色 シルト 黄褐色土(10YR5/6)含(1%) |
| 7 | 10YR2/2 黑褐色 シルト 青紫色土(30YR5/6)含(20%) | 24 10YR4/6 黄褐色 シルト 青紫色土(30YR5/6)含(20%) |
| 8 | 黑褐色土(10YR2/2)と海褐色土(10YR5/6)の混合土 10YR4/6/0含(30%) | 25 10YR4/6 黄褐色 シルト 青紫色土(30YR5/6)含(20%) |
| 9 | 黑褐色土(10YR2/2)と海褐色土(10YR5/6)の混合土 10YR4/6/0含(30%) | 26 10YR2/2 黑褐色 シルト に深く黒褐色土(10YR6/4)含(4%) |
| 10 | 10YR1.7/1 黄褐色 シルト 新黃褐色土(10YR5/6)含(20%) 黑褐色土(10YR3/2)含(30%) | 27 10YR6/4 C-H-深褐色 シルト 黄褐色土(10YR2/2)含(30%) |
| 11 | 10YR1.7/1 黄褐色 シルト 新黃褐色土(10YR5/6)含(20%) | 28 10YR1.7/1 黄褐色 シルト 黄褐色土(10YR5/6)含(1%) |
| 12 | 10YR1.7/1 黄褐色 シルト 新黃褐色土(10YR5/6)含(20%) | 29 10YR1.7/1 黄褐色 シルト 黄褐色土(10YR5/6)含(1%) |
| 13 | 10YR2/2 黑褐色 シルト 10YR5/6の混合土 | 30 黑褐色土(10YR2/2)と 黄褐色土(10YR5/6)の混合土 に深く 黑褐色土(10YR7/3)含(2%) |
| 14 | 10YR2/2 黑褐色 シルト 10YR5/6の混合土 10YR5/6の混合土 | 31 黑褐色土(10YR2/2)と 黄褐色土(10YR5/6)の混合土 に深く 黑褐色土(10YR7/4)含(1%) |
| 15 | 10YR2/2 黑褐色 シルト 10YR5/6の混合土 | 32 黑褐色土(10YR2/2)と 黄褐色土(10YR5/6)の混合土 |
| 16 | 10YR1.7/1 黄褐色 シルト | |
| 17 | 10YR2/2 黑褐色土(10YR5/6)と新黃褐色土(10YR5/6)の混合土 | |

第25図 1号畠跡



- 場所 色調 土性
 1 10YR1.7/1 黒褐色 シルト 高嶺色土(10YR5/0含2%) 植生豊か
 2 10YR1.7/2 黒褐色 シルト 高嶺色土(10YR5/0含1%)
 3 10YR1.7/3 黒褐色 シルト 高嶺色土(10YR5/0含1%)
 4 10YR2.0/1 黑褐色 シルト 灰褐色土(10YR5/3含1%)
 5 10YR2.0/2 黑褐色 シルト 莱姆色土(10YR6/0含1%)
 6 10YR2.0/3 黑褐色 シルト 莱姆色土(10YR6/0含1%)に5%黄褐色土(10YR6/0含3%)
 7 10YR2.0/4 黑褐色 シルト 莱姆色土(10YR6/0含1%)
 8 10YR3.0/1 黑褐色 シルト 莱姆色土(10YR6/0含2%)
 9 黄褐色土(10YR3/1)に5%黄褐色土(10YR6/0含1%)の混土 漢化物含(1%)
 10 黄褐色土(10YR3/1)に5%黄褐色土(10YR6/0含1%)の混土

- 11 10YR6/0 黄褐色土 黏土質シルト 黑褐色土(10YR2/2含30~40%)
 12 10YR3/6 黄褐色 粘土質シルト
 13 10YR2.5/6 黄褐色 粘土質シルト 黑褐色土(10YR2/2含9%)
 14 10YR2.2 黑褐色 シルト
 15 10YR6/6 黃褐色土(10YR6/0含5%)(10YR2/1)の混土
 16 10YR6/4 に5%黄褐色土 粘土質シルト 黑褐色土(10YR2/1)含(6%)
 17 10YR6/4 に5%黄褐色土 粘土質シルト 黑褐色土(10YR6/0含7~10%)
 18 10YR6/6 明黄褐色 地下質シルト
 19 黄褐色土(10YR5/0)と黑土(10YR2/1)の混土

第26図 2号堀跡

3号堀跡

遺構 (第28図、写真図版17)

＜位置・検出状況＞ 調査区域中央部グリッドB III f 9・g 8・g 9、B IV d 2・d 3・e 0・e 1・e 2・f 0にまたがって位置する。郭の平場の南東部にあるテラス状の部分から検出されたものである。

＜平面形・規模＞ テラス状部分を2号堀跡の南東端から南西—北東に延びている。規模は全長23m、上幅(実効堀幅)3.65~5.7m、下幅6~64cm、深さ(垂直高)1.6~1.72m、実効高2.95~4.65m、外壁法高63~146.6cmである。なお、テラス状部分の北東部は崩落した可能性があり、本堀跡は北東方向にもっと延びていたものと考えられる。

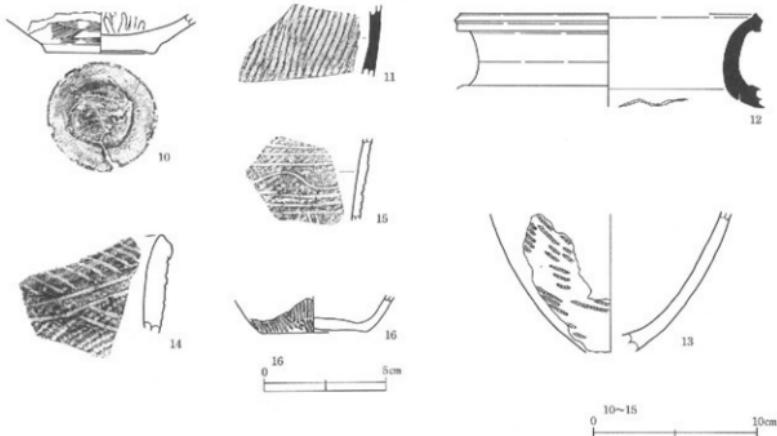
＜断面形・壁・底面＞ 断面形は薬研堀である。壁は北西壁が外傾して立ち上がり、南東壁は25cm位垂直気味に立ち上がった後、外傾している。底面は黄褐色土で堅く縮まり、木根等により凹凸が大きい。

＜埋土＞ 黒色土や黒褐色土が主体で、よく縮まっている。木根等により搅乱を受けている。

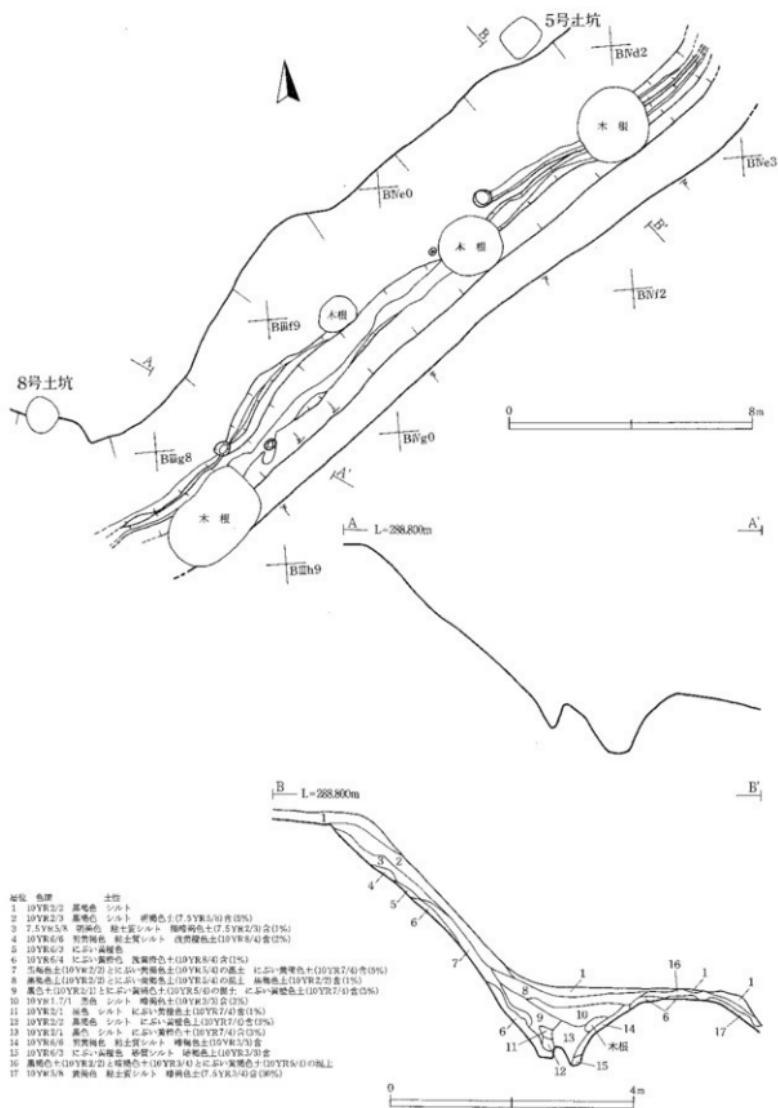
遺物 (第27図、写真図版19・20)

土器10~16が出土している。10はロクロ使用の土器器坏の底部から体部下端部である。底部は回転糸切りで、切り離し後調整されて6mm位の高台状になっており、体部は大きく外傾して立ち上がっている。胎土には径1~3mmの砂粒を含んでいる。11は須恵器甕の体部片である。外面に敲き目痕、内面に当て具痕が残っている。12は須恵器壺の肩部から口縁部である。口縁部は頸部から外反しながら立ち上がっている。口縁端部は斜め下方へ引き出され、口唇部は僅かに凸状になっている。

13~16は流れ込みの绳文土器である。13は尖底土器の底部から体部下端部である。地紋はLR単節継回転である。14・15は深鉢で、14は口縁端部に6mm間隔で原体圧痕され、口縁部下には沈線が施されている。15は上下に沈線が3本ずつ、中央に曲線が1本巡っている。16は鉢型土器の底部で、地紋はRL単節斜め回転である。



第27図 3号堀跡出土遺物



第28図 3号烟跡

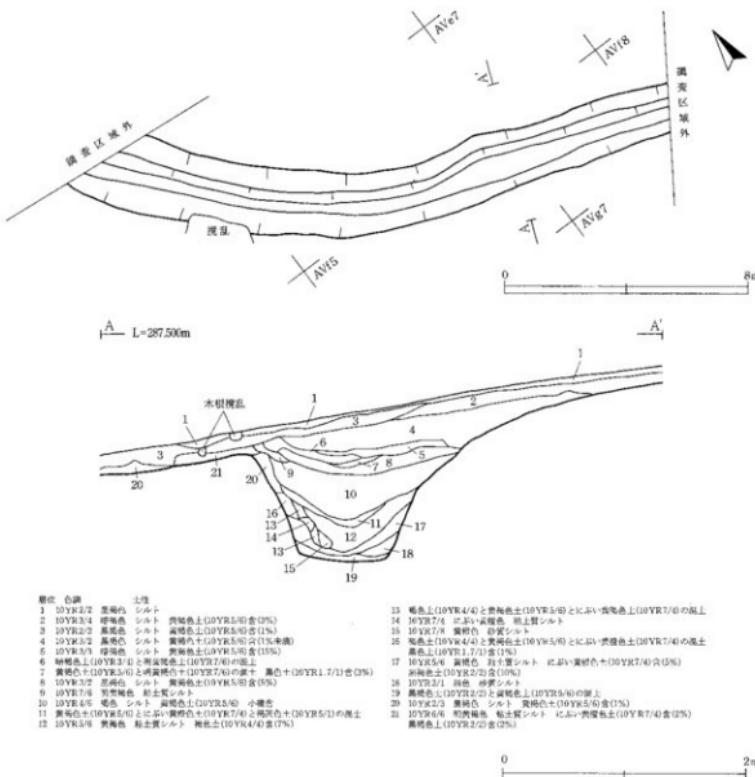
4号堀跡

遺構 (第29図、写真図版18)

＜位置・検出状況＞ 調査区域北東端部グリッドA V d 4・e 4・e 5・e 6・f 6・f 7・f 8にまたがって位置する。郭と考えられる平場の南西部のⅡ層面で、黄褐色土粒を含む黒褐色土の広がりとして検出された。

＜平面形・規模＞ 平場の縁際を南東—北西にかけて弧を描くように延びており、両端は調査区域外である。全長19.4m、上幅(実効幅)1.75~2.56m、下幅28~70cm、深さ(垂直高)81.8~107.5cmである。

＜断面形・壁・底面＞ 断面形は箱型研堀である。壁は外傾して立ち上がり、底部から35~55cmで傾きが大



第29図 4号堀跡

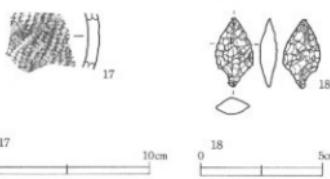
きくなる。底面は黄褐色土で堅く縮まっており、凹凸は少なく平坦である。

＜埋土＞ 黒色土や褐色土が主体で、全体に縮まっている。

遺物（第30図、写真図版20）

土器17と石器18が出土している。17は深鉢の体部片である。摩耗しており、原体ははっきりしないが、L R単節斜め回転と考えられる。外面は煤けている。

18は石鏃である。有茎で、横断面形は厚い菱形である。両側縁は緩い弧状をなしている。



第30図 4号壙跡出土遺物

8. 遺構外の出土遺物

遺構外から出土した遺物は、縄文土器、土師器、石器、鉄製品である。出土量が少ないとから、(1) 縄文土器、(2) 土師器、(3) 石器、(4) 鉄製品に分けて記述する。

(1) 縄文土器 (第31図、写真図版20)

19・20は尖底土器の底部である。胎土に纖維を含んでいる。21は深鉢の口縁部である。口縁部に縄文原体圧痕 (R L) が3本、体部は木目状撚糸文が施されている。19・20は前期初頭、21は前期末と考えられる。

22~24は深鉢である。22は口縁部である。口縁部には幅5mmの粘土紐で隆起が2本巡っており、下端部には沈線が3本巡っている。23・24は体部で、23は沈線が4本巡り、縦位にも沈線が2本巡っている。24は幅4mmの沈線が2本巡っており、内外両面とも一部焼けている。中期中葉と考えられる。

25は浅鉢の口縁部である。外面に沈線が3本、内面には口縁部に沿って1本巡っている。晩期末と考えられる。

26~29は時期不明の深鉢及び鉢型土器の底部である。いずれも外傾して立ち上がっていいる。地紋は26がLR単節縄文で、上は縦回転と横回転、下は横回転、27・29がLR単節縄文横回転、28がRL単節縄文縦回転である。26は内外両面とも焼け、体部下端部には炭化物が付着している。

(2) 土師器 (第31図、写真図版20)

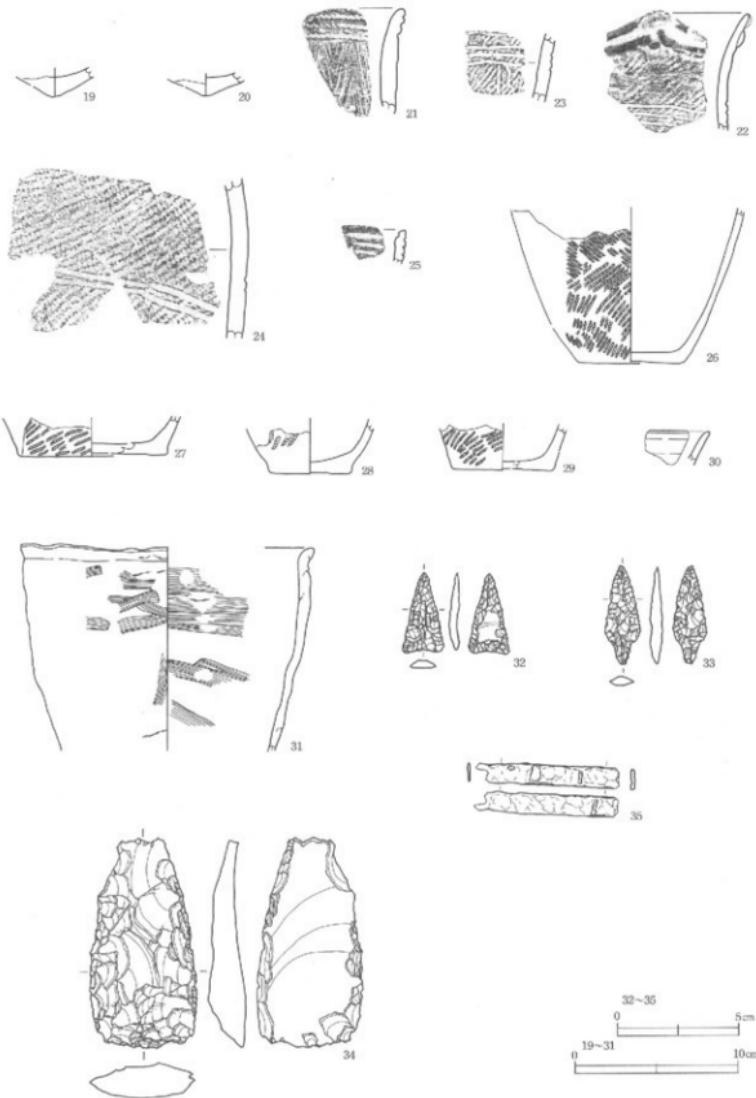
30・31が出土している。30はロクロ使用の土師器壺の口縁部である。胎土に径1mmの砂粒を少量含んでいる。31はロクロ不使用の土師器壺である。体部最上部に体部最大径を持つと考えられ、口縁部は短く、頭部から緩く外傾している。外面下端部には炭化物が付着し、内面はほぼ全面焼けている。

(3) 石器 (第31図、写真図版20・21)

32~34が出土している。32・33は石鏃で、32は無茎で、両側縁は直線状である。茎部は僅かに窪んでいる。33是有茎で、先端が僅かに欠けている。横断面形は平たい菱形である。34は石箇である。両側縁と先端部に刃部が形成されている。

(4) 鉄製品 (第31図、写真図版20)

35は刀子の柄部と考えられるが、形状から刀子以外の鉄製品の可能性もある。残存長4.9cm、幅1.2cm、厚さ0.5cmである。



第31図 造構外の出土遺物

第2表 繪文土器觀察表

掲載番号	出土地点・部位	器種	法 量(cm)	文様(原体)の特徴等				造物 器 高	胎 土	遺物 同様	
				口径	底径	器高	窓				
6	生活状跡・堆土中部	深鉢	[6.7]	燃系	直窓切頭	9.8			径1~2mmの砂粒含	17	19
13	3号堆跡・堆土上部	深鉢	[6.6]	尖頭器	R直窓切頭回転	10.2	口縁部下凹線	口縁部下凹線	径1mmの砂粒含	27	29
14	3号堆跡・堆土下部	深鉢	[5.7]	口縁部斜面R直窓切頭回転	直窓切頭	10.2	口縁部下凹線	円筒上端e式	径1mmの砂粒含	27	29
16	3号堆跡・堆土上部	深鉢	[4.4]	上・下に平行弦線3本	中間に波状の花紋1本	10.5	大穴8a式窓付		径1mmの砂粒含	27	29
17	4号堆跡・堆土中部	深鉢	[3.6]	ややL字窓	地紋R直窓斜斜め回転?	10.5	地紋R直窓斜斜め回転		径1mmの砂粒含	30	20
19	CII-a・I層	深鉢	[1.8]	尖頭	前縁切頭	10.5			直窓切頭	31	31
20	CII-b 5・I層	深鉢	[1.4]	尖頭	前縁切頭	10.5			直窓切頭	31	20
21	D I d 5・II層	深鉢	[6.7]	口縁部横文圧板(R L)	木目状燃系文	10.5	口縁部横文圧板3本	木目8a式窓付	金型母含	31	20
22	BIII-d 7・II層	深鉢	[7.3]	口縁部強音	下端部平行燃文4本	10.5	上・下に平行弦線4本	木目8a式窓付	径1~2mmの砂粒含	31	20
23	不明	深鉢	[4.4]	口縁部強音	下端部平行燃文4本	10.5	上・下に平行弦線4本	木目8a式窓付	径1mmの砂粒含	31	20
24	BIII-f 7・III層	深鉢	[10.1]	弦線2本	地紋R直窓斜斜め回転	10.5	地紋R直窓斜斜め回転	木目8a式窓付	径1mmの砂粒含	31	20
25	D I e 5・f 5 II層	浅鉢	[2.1]	沈線	外腹3本、内腹1本	10.5	沈線	外腹3本、内腹1本	金型母含	31	20
26	BIII-e 6・II層	深鉢	[6.5]	[9.6]	地紋R直窓斜斜め回転	10.5	地紋R直窓斜斜め回転	外腹燃化付着	31	20	
27	BIII-i 1・II層	深鉢	[9.2]	[2.4]	地紋R直窓斜斜め回転	10.5	地紋R直窓斜斜め回転	外腹燃化付着	径1~2mmの砂粒含	31	20
28	BIII-f 8・II層	鉢形土器	[5.1]	[3.4]	地紋R直窓斜斜め回転	10.5	地紋R直窓斜斜め回転	—	径1mmの砂粒含	31	20
29	CII-h 3・i 3 I層	鉢形土器	[6.2]	[2.9]	地紋R直窓斜斜め回転	10.5	地紋R直窓斜斜め回転	—	直窓切頭	31	20

第3表 土師器・須恵器觀察表

掲載番号	出土地点・点	種類・形	外・面・縫・繩	内・面・縫・繩				底	面	成形	法 径(cm)	法 底 径(cm)	法 高 度(cm)	内部 構造	写真 同様
				口絞部	体部	窓	蓋								
1	1号住居跡・堆土上	十脚器	YN	K	N	N	木蓋裏				(19.2)	—	16.2	12	19
2	1号住居跡・地土上	土師器	YN	K	N	N	木蓋裏				—	13.2	[16]	12	19
3	1号住居跡・地土上	土師器	YN	K	N	N	木蓋裏				—	10.7	[14.5]	12	19
4	2号住居跡・地土上	土師器	YN	K	N	N	木蓋裏				—	7.4	[1.7]	14	19
7	7号住居・堆土中部	土師器	YN	M	直板斜切り	—	内面黒色處理	高台			(6)	[4]	20	19	19
8	1号堆跡・堆土上部	土師器	YN	M	直板斜切り	—	ロクロ	内面黒色處理			(5.8)	1.4	24	19	19
9	1号堆跡・堆土上部	土師器	YN	M	直板斜切り	—	ロクロ	内面黒色處理			(7.6)	1.8	24	19	19
10	3号堆跡・堆土上部～中部	土師器	YN	M	直板斜切り	—	ロクロ	内面黒色處理			6.8	2.4	27	19	19
11	3号堆跡・堆土上部	須恵器	YN	T	A	—	—	—			—	4.5	27	20	20
12	3号堆跡・堆土上部	須恵器	YN	T	A	—	—	—			(18.1)	—	5.7	27	20
30	BIV-a 2・II層	土師器	YN	N	N	N	木蓋裏				—	—	—	20	20
31	CII-c 8・I層	土師器	YN	N	N	N	木蓋裏				(17.7)	—	[12.8]	31	20

第4表 石器類繫表

器 種 名	出 土 地 點	器 種	計 長さ		測 幅 厚さ		重 さ (g)	特 徴	備 考	石 材	產 地	遺 物	写真 図版
			長さ	幅	厚さ	重さ							
18 4号墳跡	石板		2.8	1.6	0.7	1.6				真骨		夷羽山原?	30 20
32 D I d 5	石板		3.3	1.7	0.4	2.5				真骨		夷羽山原?	31 20
33 C II e 5	石板		4	1.5	0.4	2.7				真岩		夷羽山原?	32 20
34 C II c 8	石板		8.6	4.4	1.6	57.5				貝針		夷羽山原?	34 21

第5表 鋼製品觀察表

器 種 名	出 土 地 點	器 種	計 長さ		測 幅 厚さ		重 さ (g)	特 徴	備 考	石 材	產 地	遺 物	写真 図版
			長さ	幅	厚さ	重さ							
5 2号生田跡・床土(床板)等	刀劍		[23.3]	3.5	0.5	116.9							14 19
35 B IV区・1層	刀子?		[8.8]	1.3	0.3	12.4							31 21

〔 〕内は複数種

V まとめ

1. 遺構

(1) 平安時代の堅穴住居跡

2棟の検出である。各堅穴住居跡（以下住居跡と略記）の平面形や規模については第6表にまとめてある。

＜占地＞ 調査区域中央部と郭部分からの検出である。

＜平面形・規模＞ 1号住居跡は掘り方のみの検出、2号住居跡は遺構の約半分が調査区域外であるが、どちらも隅丸方形と考えられる。規模はそれぞれ一辺が4.5m前後、7m前後と推定され、小型と大型の住居跡である。

＜埋土＞ 2号住居跡は黒色土が主体でよく縮まっている。（1号住居跡は省略）

＜壁・床面＞ 2号住居跡の壁はほぼ垂直に立ち上がっており、床面は凹凸が少なく平坦で、全体によく縮まっている。（1号住居跡は省略）

＜柱穴・柱穴配置＞ どちらも柱穴が検出された。1号住居跡は4本柱である。2号住居跡は壁際に柱穴が配されており、壁構も巡らされている。南東壁中央部には壁構が切れている部分があり、出入り口の可能性がある。

＜カマド＞ 1号住居跡は北東壁南東寄り、2号住居跡は北東壁中央部に設置されている。どちらもカマド本体の原型を保っておらず、煙道部の構造も不明である。

＜時期＞ 2号住居跡は出土遺物から10世紀頃の可能性があるが、1号住居跡の詳しい時期は不明である。

第6表 平安時代の堅穴住居跡一覧表

（ ）内は推定値または推定形

遺構名	平面形	規模(m)	壁高(cm)	カマド位置	煙道部	備考
1号住居跡	隅丸方形	4.3 × 4.45	—	北東壁南東寄り	不明	掘り方のみ
2号住居跡	（隅丸方形）	(4.7) × 7.2	28.4 ~ 47.6	北東壁中央部	不明	刀剣出土

(2) 中世の堅穴住居跡

調査区域西南部隅から1棟検出されている。一辺3m前後の隅丸方形で、壁際に柱穴が配されている。南東壁の一部は張り出しており、出入り口の可能性がある。出土遺物はない。

(3) 住居状遺構

郭部分南東隅からの検出である。平面形は隅丸方形で、埋土に十和田a降下火山灰が含まれている。壁は垂直に立ち上がっており、北東壁の中央部は張り出している。十和田a降下火山灰を含んでいることから平安時代の可能性があるが、形状から中世の可能性も否定できない。

(4) 土坑

9基検出された。調査区域南西部隅と郭部分からの検出である。平面形は円形3基、楕円形5基、隅丸方形1基で、楕円形が多い。他の遺構と重複しているのが2基、遺物が出土しているのが1基ある。9基のうち平安時代もしくはそれ以前と考えられるのが2基あるが、他は時期や性格は不明である。平面形・規模は第7表にまとめてある。

第7表 土坑一覧表

番号	遺構名	平面形	開口部径(cm)	底部径(cm)	深さ(cm)	備考
1	1号土坑	楕円形	51×66	30×50	34.1	
2	2号土坑	楕円形	60×77	47×67	40.6	
3	3号土坑	楕円形	55×66	36×51	60.7	
4	4号土坑	楕円形	200×205	170×210	65.0	2号住居跡と重複
5	5号土坑	隅丸方形	110×124	80×90	42.5	
6	6号土坑	円形	100×112	70×80	49.1	
7	7号土坑	円形	250×265	210×215	143.8	遺物出土
8	8号土坑	楕円形	190×230	155×200	37.8	
9	9号土坑	円形	210×215	200×202	59.0	住居状遺構と重複

(5) 柱穴状小土坑

調査区域南西部隅から6基検出された。平面形は円形や楕円形で、柱穴配置に規則性はない。時期や性格については不明である。

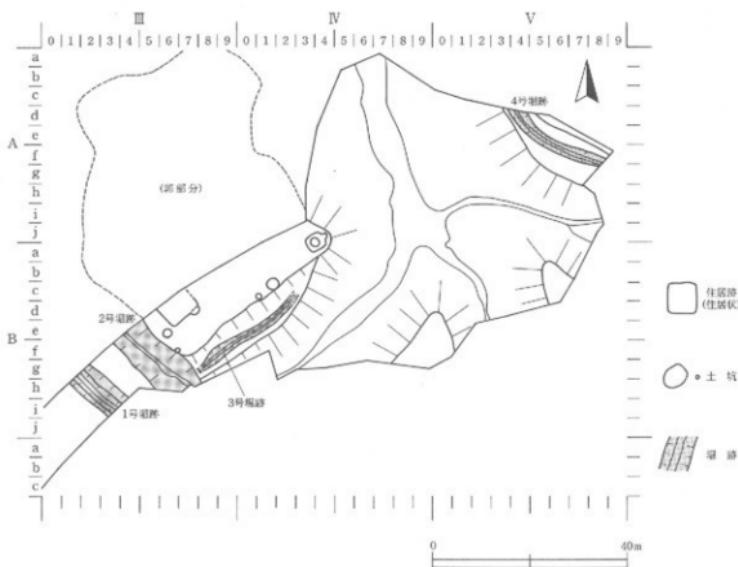
(6) 溝跡

1条検出された。埋土上部に十和田a降下火山灰を含んでいることから平安時代の可能性があるが、時期は特定できない。性格も不明である。

(7) 堀跡

4条検出された。郭の南西側から2条（1号・2号堀跡）、テラス状部分から1条（3号堀跡）、調査区域東端部から1条（4号堀跡）である。

1号・2号堀跡は二重堀となっており、2号堀跡は郭部分に沿って巡らされているが、1号堀跡は10m程北西の崖部（調査区域外）へ続いているものと推定される。3号堀跡はテラス状部分からの検出である。テラス状部分は北東部が崩落した様子が窺われることから、本堀跡は更に北東部へ延びていたものと考えられる。4号堀跡は郭の谷部を隔てた対岸の平場からの検出であり、平場の縁際を緩く弧を描くように巡っている。この平場は地形から考え、郭の可能性があることから、それと関連あるものと考えられる。なお、各遺構の規模については第8表にまとめてあり、位置については第32図に示してある。



第32図 堀 跡

第8表 堀跡一覧表

遺構名	全長	上幅(実効堀幅)	下幅	深さ(堀高)
1号堀跡	9.3 m	5.05~5.6 m	62~98 cm	148.9~200.5 cm
2号堀跡	15.5 m	6.0~8.7 m	10~48 cm	235.5~410.6 cm
3号堀跡	23.0 m	3.65~5.7 m	6~64 cm	160.0~172.0 cm
4号堀跡	19.4 m	1.75~2.56 m	28~70 cm	81.8~107.5 cm

以上、検出された遺構についてまとめてみたが、ここで、北の城館跡と安代町内の中世城館跡について若干の補足をしてみたい。

P5「4.周辺の遺跡」に記したとおり、安代町内には現在21ヵ所の中世城館跡が知られている。このうち、形式、遺構、城主が分かっているものは、田山古館、田山館、安保館、佐比内館、荒星館、五日市館である。第9表はそれらをまとめたものである。

第9表 安代町内の館跡（一部）

名 称	別 称	所 在 地	形 式	現 状	遺 構	城 主 等
田山古館		大沢田	丘陵・単郭式	畑、山林	平場、空堀	田山氏
田山館	沢口館	沢口	丘陵・複郭式	畑、山林	上館・中館・下館の三郭、空堀	田山氏、安保氏
安保館		藍野々道ノ下	不詳	不詳	不詳	安保氏
佐北内館	館市館	館市	丘陵・単郭式	畑、山林	平場、空堀	佐北内氏
荒屋館	新町館	荒屋新町	不詳	墓地、塙内	不詳	荒屋氏
五日市館	五日市里城	五日市	丘陵・単郭式	畑	平場、空堀	五日市氏

北の城館跡を含め多くの城館跡は、詳細についてまだ不明な点が多い。今回の北の城館跡の発掘調査は、館跡の郭部分の一部の調査であり、館跡の全体像をつかむことはできなかつたが、郭の存在、テラス状部分の存在、堀の形状と規模等が明らかになった。特に郭部分は南西部が二重堀になっており、また、南東部から北東部にかけて深い谷部になっていることから、防御上堅固に造られていることが分かった。残念ながら、築城時期や城主等については分かっていない。今後の調査により、館跡の全体像や城主等が明らかになることを期待したい。

2. 遺物

出土した遺物は少量で、大コンテナ1箱分である。本遺跡は城館跡であるが、それに関連する遺物は出土しなかつた。ここでは、縄文時代の遺物と古代以降の遺物の2つに分けてまとめてみたい。

(1) 縄文時代の遺物

土器は前期初頭の尖底土器、前期末・中期中葉の深鉢、晩期末の浅鉢が出土している。いずれも細片である。石器は石礫3点、石第1点が出土している。土器、石器とも出土地点にまとまりはない。

(2) 古代以降の遺物

土師器、須恵器、鉄製品が出土している。土師器は壺、甕である。壺は6点の出土で、ロクロ使用は5点、他1点は不明である。ロクロ使用のうち2点と不明のもの1点は内面黒色処理されている。また、底部切り離しが回転糸切りのものは4点である。

甕は4点で、いずれもロクロ不使用である。4点のうち3点は1号住居跡の焼土上からの出土である。底部に木葉痕が残るものが1点ある。

須恵器は甕と壺である。土師器に比べ出土量は少ない。

鉄製品は刀子と考えられる鉄片と刀剣である。刀剣は2号住居跡からの出土である。刀剣については別項で触ることにする。

<刀剣について>

2号住居跡から刀剣5が出土している。岩手県内でこれまで古代の住居跡から刀剣が出土した遺跡は、上

八木田IV遺跡（盛岡市）、桂平遺跡（浄法寺町）が知られている。上八木田IV遺跡ではXVIK 1 d 住居跡から出土している。切先部は失われており、平造り、棟は角棟である。鎧も出土している。時期は9世紀前半としている。桂平遺跡でもVID-1 住居跡から出土している。切先から24.5cmの部分が残存している。切先是反らず、むしろ幾分下がる。切先は丸みを帯び、短峰である。明瞭な鷲はみられない。時期は平安時代後葉としている。

刀剣類は墓に副葬される例が多く、一般的な住居跡から出土する例は少ないとされる。本遺跡の場合、刀剣は住居跡の南東壁隅の床上から出土している。廃棄したものか、特別な意味を持つものは不明であるが、住居跡内から出土したという点では貴重な資料が得られたといえる。

引用・参考文献

岩手県立博物館（1982）：「岩手の土器」

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1988）：『桂平遺跡発掘調査報告書』 岩埋文第110集

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1992）：『上八木田Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡発掘調査報告書』 岩埋文第177集

写真図版

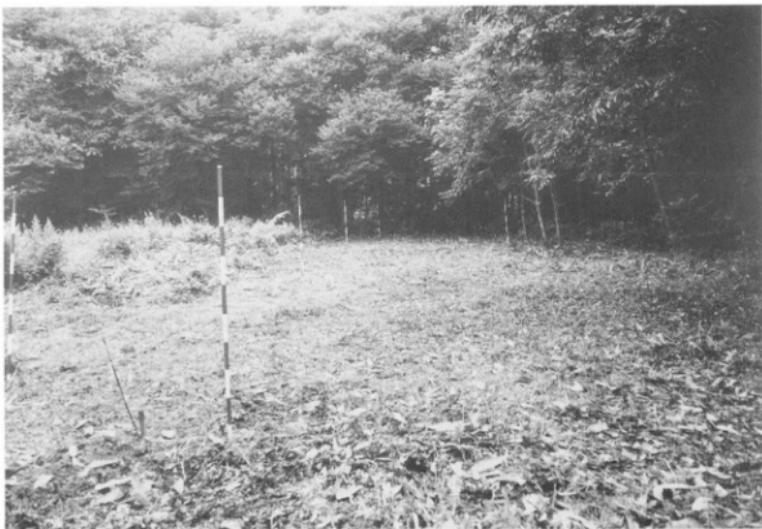


遺跡遠景（北東から）

写真図版1 遺跡遠景



南西部近景（南西から）



館跡郭部分近景（南西から）

写真図版2 調査区近景



調査区全景（北西から）



土層断面Ⅰ（南東から）



土層断面Ⅱ（南東から）

写真図版3 調査区全景、土層断面



館跡郭部分近景（東から）



北東端部近景（西から）

写真図版4 調査区近景



北東部断面B-B'（南西から）



北東部断面B-B'（西から）



北東部断面C-C'（南から）



北東部断面C-C'（南から）



作業の様子（2号掘跡）

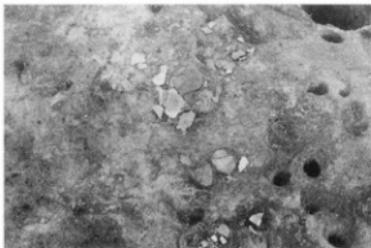
写真図版5 北東部土層断面、作業の様子



1号住居跡完掘全景（南西から）



1号住居跡断面（南東から）

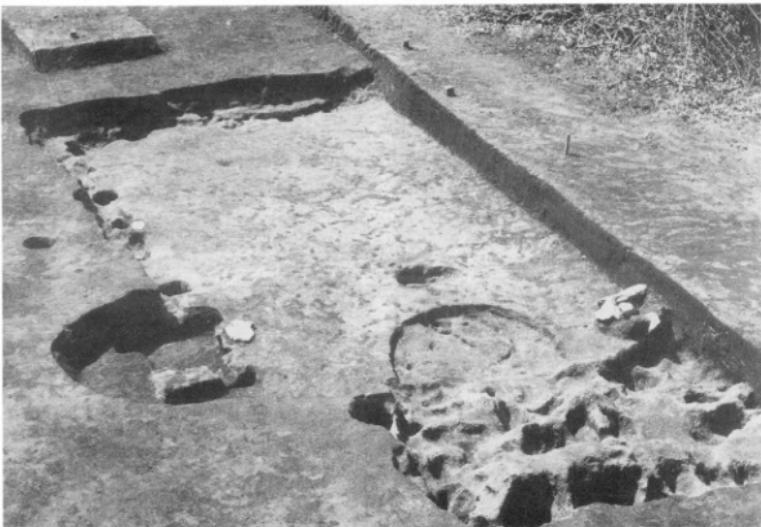


遺物出土状況（南西から）



カマド燃焼部焼土断面（南西から）

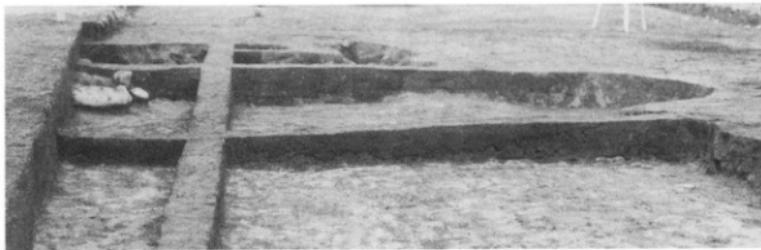
写真図版 6 1号住居跡



2号住居跡完掘全景（東から）



2号住居跡断面（南東から）



2号住居跡断面（南西から）

写真図版 7 2号住居跡（1）



カマド検出状況（南東から）



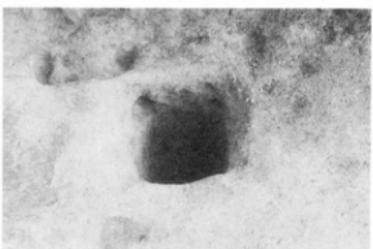
カマド燃焼部焼土断面（南西から）



壁溝断面 e - e' (南東から)



焼土断面 f - f' (南東から)



P11完掘（北西から）



P10・P11完掘（北西から）



遺物出土状況（北から）

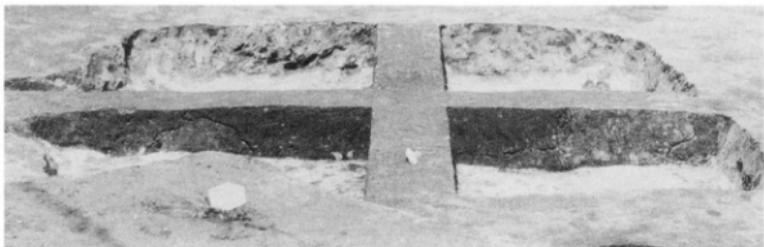


作業の様子

写真図版 8 2号住居跡（2）



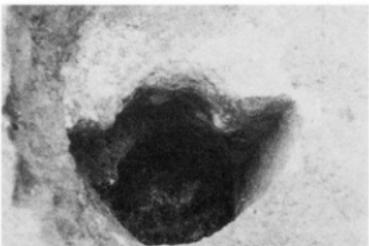
完掘全景（南から）



断面（東から）



P 4 断面（西から）

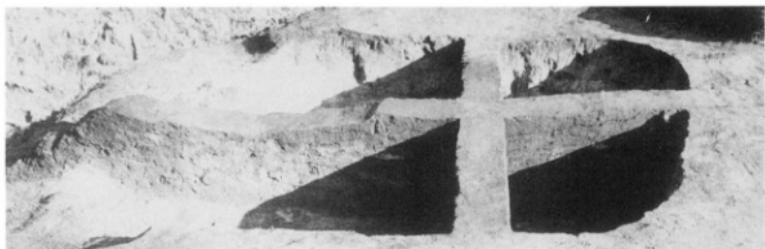


P 5 断面（南西から）

写真図版9 中世の住居跡



完掘全景（北から）



断面（北から）



出入口部分（北西から）

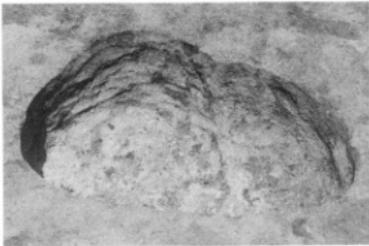


作業の様子

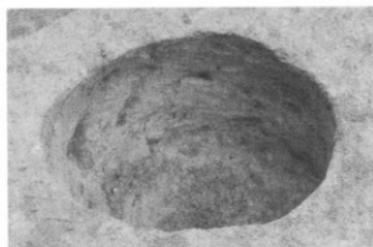
写真図版10 住居状遺構



1号土坑完掘全景（南東から）



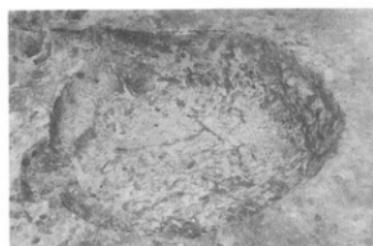
2号土坑完掘全景（南西から）



3号土坑完掘全景（南東から）



3号土坑断面（南東から）



4号土坑完掘全景（南西から）



4号土坑断面（南西から）



5号土坑完掘全景（北東から）



5号土坑断面（北東から）

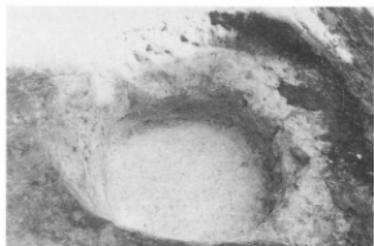
写真図版11 1号・2号・3号・4号・5号土坑



6号土坑完掘全景（西から）



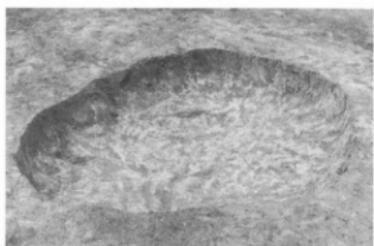
6号土坑断面（西から）



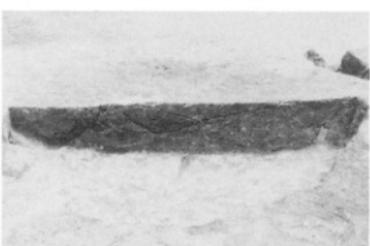
7号土坑完掘全景（南西から）



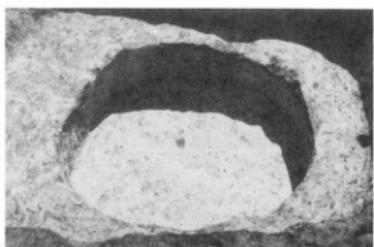
7号土坑断面（南西から）



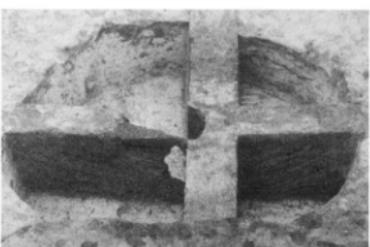
8号土坑完掘全景（南から）



8号土坑断面（南から）



9号土坑完掘全景（北から）



9号土坑断面（北から）

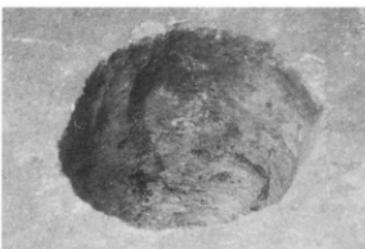
写真図版12 6号・7号・8号・9号土坑



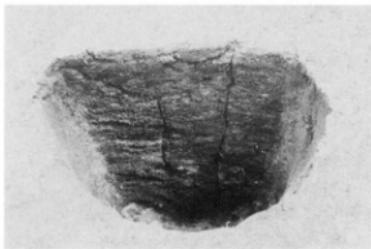
柱穴状小土坑全景（南西から）



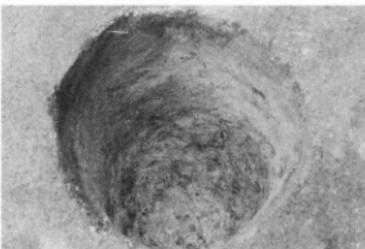
P 3 断面（西から）



P 4 完掘全景（西から）

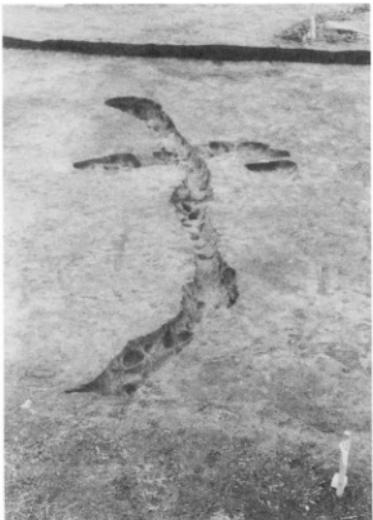


P 5 断面（西から）



P 5 完掘全景（西から）

写真図版13 柱穴状小土坑



溝跡完掘全景（南東から）



溝跡断面A-A'（北西から）

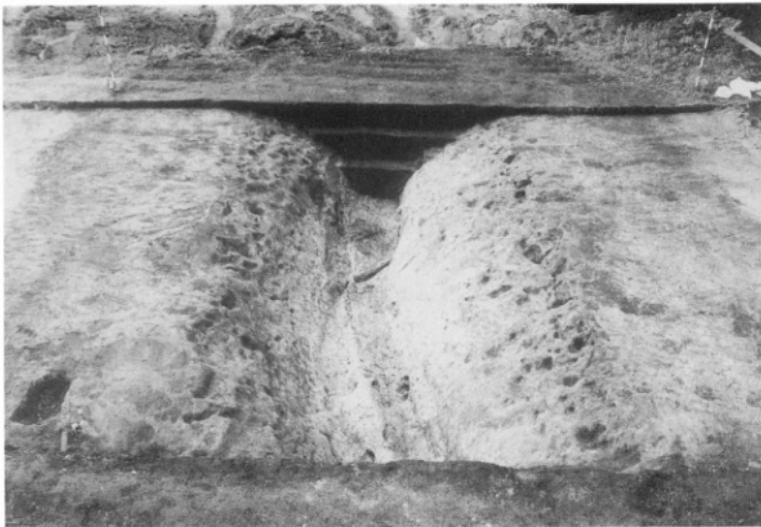


溝跡断面B-B'（西から）

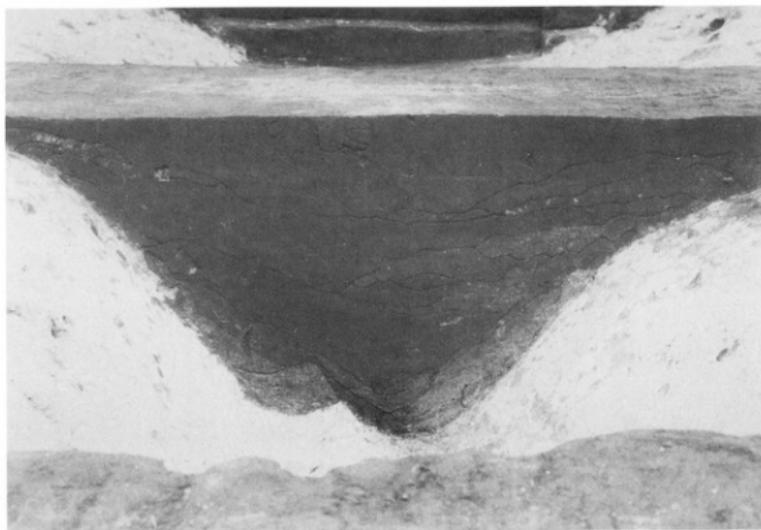


現地説明会

写真図版14 溝跡・現地説明会



1号堀跡完掘全景（南東から）



1号堀跡断面（南東から）

写真図版15 1号堀跡



2号堀跡完掘全景（北西から）



2号堀跡断面（南東から）

写真図版16 2号堀跡



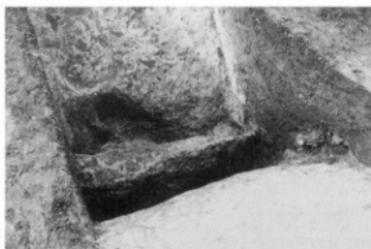
3号堀跡完掘全景（南西から）



3号堀跡断面B-B'（南西から）



3号堀跡断面B-B'（南西から）



3号堀跡底部（北西から）



3号堀跡底部（北西から）

写真図版17 3号堀跡



4号堀跡完掘全景（南東から）



4号堀跡断面（南東から）



作業の様子



現地説明会

写真図版18 4号堀跡、現地説明会



写真図版19 遺構内出土遺物(1)



写真図版20 遺構内出土遺物(2)・遺構外出土遺物(1)



34



35

34 : S = 1/2

35 : S = 2/3

写真図版21 遺構外出土遺物[2]

報告書抄録

ふりがな	きたのじょうやかたあとはくつちょうさほうこくしょ						
書名	北の城館跡発掘調査報告書						
副書名	中山間地域総合整備事業浅沢地区埋蔵文化財発掘調査						
卷次							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第438集						
編著者名	佐々木信一						
編集機関	財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL 019-638-9001・9002						
発行年月日	西暦 2003年11月28日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	北 緯 遺跡番号	東 綏	調査期間	調査面積	調査原因
きたのじょうやかたあとは 北の城館跡	いわてけんいわてぐん 岩手県岩手郡 あしらちょうあざいしづみ 安代町字石神 43-1ほか	03523 -1261	J E 55 7分 17秒	36度 4分 27秒	140度 ~ 2002.10.11	3,920m ²	中山間地 域総合整 備事業に 係わる緊 急発掘調 査
世界側地系							
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
北の城館跡	集落跡 城館跡	平安時代	竪穴住居跡 住居状遺構 土坑	2棟 1棟 2基	縄文土器(前期、中期、 晩期) 土師器・須恵器 鉄製品(刀剣、刀子) 石器	二重堀を持つ城館跡	
		中世	竪穴住居跡 堀 跡	1棟 4条		平安時代の竪穴住居 跡から刀剣出土	
		不明	溝 跡 土 坑 柱穴小土坑	1条 7基 6基			

平成15年度 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員名簿

所長 木村 昇

副所長 平野 允苗

〔管理課〕

課長	基沢 正吾	嘱託	高橋 照雄
課長補佐	山岸 直美	"	湯澤 邦子
主査	中嶋 賢一	"	沼田 テル子
主事	猿橋 幸子	"	伊藤 淑子

〔調査第一課〕

課長	佐々木 勝	文化財調査員	北村 忠昭
課長補佐	佐々木 清文	"	八木山 栄枝
文化財専門員	金子 昭彦	"	丸山浩治
文化財調査員	吉田 充	"	北田勲
"	亀 大二郎	"	島原征
"	野中 真盛	期限付調査員	坂部造
"	新妻 伸也	"	小林恵
"	阿部 勝則	"	藤原弘志
"	杉沢 昭太郎	"	小針大志
"	西澤 正晴	"	太田代彦
"	村木 敬	"	新井田 えり子

〔調査第二課〕

課長	三浦 謙一	文化財調査員	星雅之
課長補佐	中川重紀	"	佐藤淳一
"	高橋義介	"	星幸文
文化財専門員	小山内透	"	溜浩二郎
"	金子 佐知子	"	本多準一郎
"	濱田 宏	"	丸山直美
文化財調査員	赤石 登	"	福島和寛
"	阿部 真澄	"	米田拓
"	水上 博	"	須原美和
"	阿部 肇	"	中村繪智
"	早坂 淳	"	川又晋
"	小松 則也	"	村田淳
"	阿部 德幸	(村上)	(村上拓)
"	窪岩 伸吾	"	齋藤 麻紀子
"	龟澤 盛行	"	石崎 高臣
"	飯坂 重明	"	吉田里和
"	鈴木 肇	"	立裕
"	林 駿	"	江藤收
"	阿部 孝明	"	駒木野智寛
"	羽柴 直人	"	

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第438集

北の城館跡発掘調査報告書

中山間地域総合整備事業浅沢地区埋蔵文化財発掘調査

印刷 平成15年11月21日

発行 平成15年11月28日

発行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185

TEL (019) 638-9001・9002

FAX (019) 638-8563

印 刷 有 限会社 内 海 印 刷

盛岡営業所 〒020-0875 岩手県盛岡市清水町8-8-108

TEL (019) 622-0288

本 社 〒026-0041 岩手県釜石市上中島町4-2-4

TEL (0193) 23-5511

